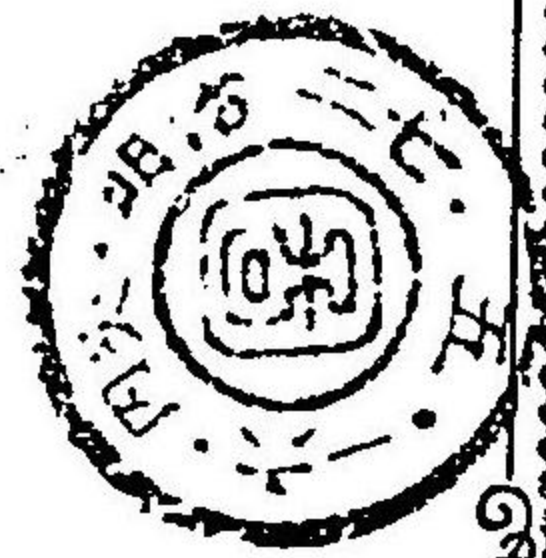


英國神學
博士監督
ウ井ルバルフヲルス講演

高橋五郎翻譯

職指鍼

日本東京印行



ADDRESSES TO CANDIDATES

FOR

ORDINATION

ON THE

QUESTIONS IN THE ORDINATION SERVICE.

BY

SAMUEL WILBERFORCE, D.D.,

SOMETIME BI-HOP OF OXFORD.

TRANSLATED BY

TAKAHASHI GORO.

PREFACE TO THE JAPANESE EDITION.

The Addresses contained in this book were given in the first instance to young men about to take Orders in the Church of England; and contain, therefore, as might be expected, some few allusions to certain circumstances peculiar to the Church of England alone.

But in their dealings with the broad and fundamental principles of a faithful Christian Ministry, the Addresses will be found to be no less applicable to us in Japan than to those for whose help and guidance they were originally delivered: and their power to search the heart, quicken the conscience, and renew the fires of consecrated zeal will be felt and acknowledged by all who count the Ministry a most solemn and sacred calling, and who look forward to it, or serve in it, with joy, but with joy that is mingled with the fear and trembling of those who know that because God worketh in them and Christ is present with them they are all the more required to be faithful, and bound not to come short but be found worthy of receiving a full reward for their labor.

In the faith that these Addresses will be generally useful to the Church, and of great value even to those who, in all points of doctrine and Churchmanship, do not agree with their distinguished author, they have been translated into Japanese and are now commended both to the Clergy and Catechists of the Nihon Sei Kokwai, and to the larger body of all of every name who are workers together with Christ for the increase and the coming of His Kingdom.

H. D. Page.

Whitsun-tide 1894,

Trinity Divinity School, Tokyo.

和譯聖職指鍼序譯文

此書に載たる講話は英國教會に在て聖職に就かんとする青年輩に先以て與へたる者なり、故に必然の勢として、英國教會に獨り特有なる若干の事情にも幾分か論及したる處なきに非ず。

然れども忠信なる基督教聖職の大則原理を論ずるに至りてや、此等の講話は日本に於ける聖職志願者にも適用すべきこと決して其英國教會の聖職員に適切なりしに譲る無し。而して此等の講話が心腸を探り、良心を活かし、聖潔なる熱心の火を燃やすの力は、必ず凡て聖職を最も莊重神聖なる務と算へ、喜びながらも亦恐れ慄きて之を望み或は之に事ふる人々の均く感じ且認る所なるべし。實に此聖職員たるや神これを以て働き、基督これと偕にいます者なるに因て、皆尤も忠信ならずんばあるべからず、其勤勞の報賞に漏れずして十分に之を受くるに堪ふる者とならずんばあるべからず。

されば、此等の講話は必ず唯に我が教會に一般に有用ならんのみならず

和譯序譯文

ズ、又教義と宗制との諸點において本書の卓拔なる著者と説を異にする人々にまでも大價値ある者ならんと信じて、茲に之を和譯して刊行し、謹で日本聖公會の教師諸君及び傳道者諸君に之を薦め、併せて又凡そ基督の國を進め且來さんために基督とともに勞らきつゝある衆多の人士に恭しく之を薦む。

一千八百九十四年聖靈降臨日

明治廿七年五月

ヘーソ謹識

聖職指鍼原序

本書の講話は我がオクスフテルドの監督領に於て聖職志願者たちにもかひて派立式ごどに相續で述たる者なり。今之を刊行したるは一は我が講筵に之を聽きたる人々の切に求むるあるが爲めなり、本書の翻閱庶幾くは彼等をして其生涯における最も深き感情及び最も肅かなる頃刻の幾分を回憶せしめん。一は我が大に其判断を信任する朋友諸士此等の講話全能神の祝福に由て必ず廣く裨益する所あらんと思ひたるが爲めなり。本書の眼目たるや我が教會の派立式文(任職式文)の意味を説明すると同時にまた夫の多福なれども危険なる聖職を志願する人々の敬虔なる感情を鼓舞せんとするに在りき。願はくは此種の企圖に於て一に其助成を仰ぎ且必要とする聖靈なる神、凡そ之を讀まん人々の心に此の絶大なる真理を貫徹せしめ給はんことを。——此等の真理は、我が講演如何に拙なかりしにもせよ、是れ本書に於て闡明せんと試みたる者なれば也。願はくは聖靈——基督の教會に永へに宿りた

原序

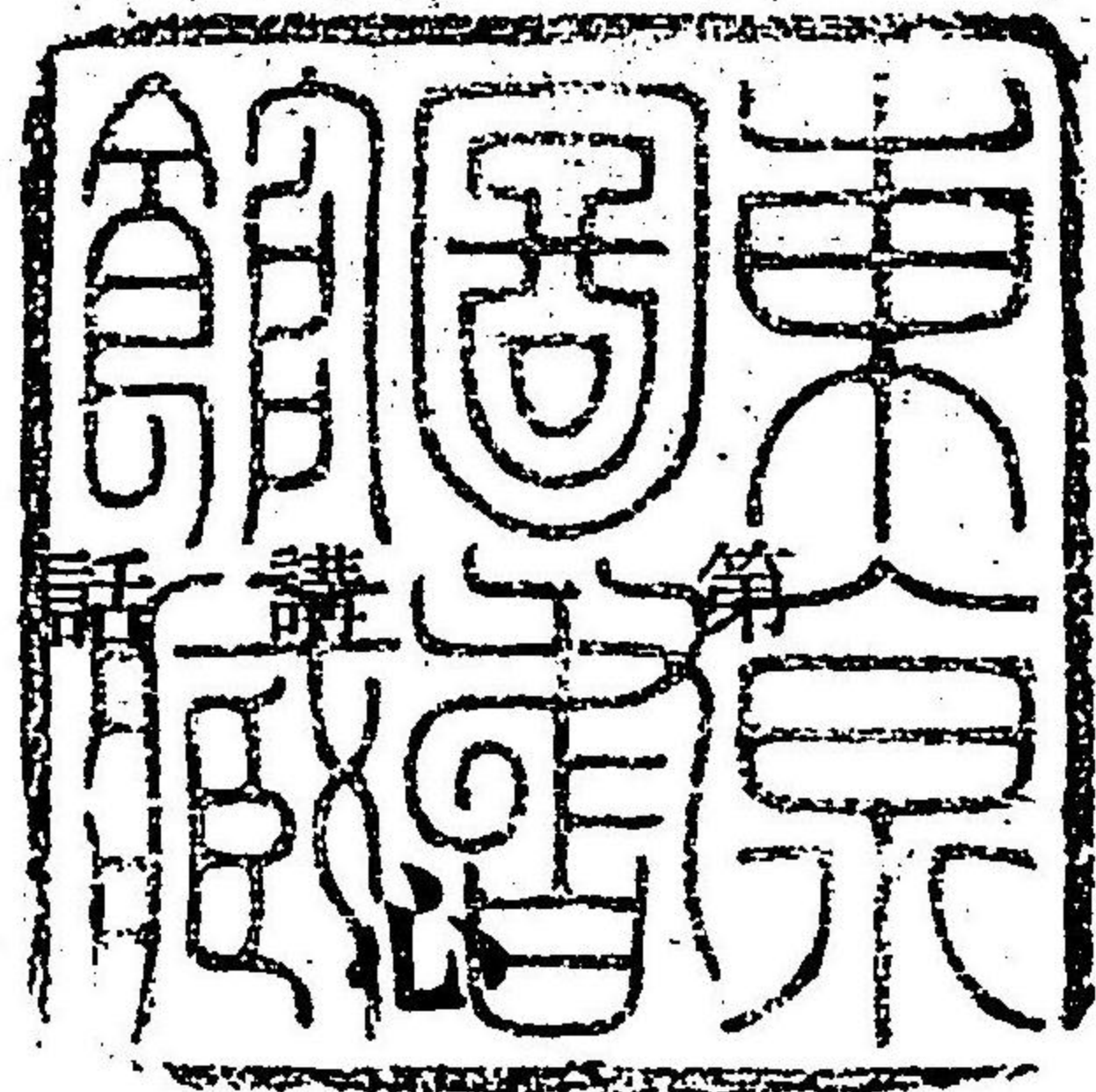
まふ者——此等の文字を以て其祝福の渴仰者輩に恩澤を降らしたまはんことを願はくは聖靈なる神、今茲に御父と御子と聖靈の名を以て授受する夫の神妙なる聖職の活特質および本色を其年少志願者の精神に銘刻せんと務むる此微衷を基督のために幸ひに嘉納したまへ。嗚呼三位一體にして萬福無盡なる神に願くは讚美と榮光今も後も長久に歸せんことを。

一千八百五十九年基督降誕日

ウヰルバルフナルス識

聖職指鍼目録

第一講話	心衷の召	第一頁
第二講話	神の榮光	第廿九頁
第三講話	聖書の足備	第五十三頁
第四講話	教義サクラメント及誠規	第八十七頁
第五講話	謬見及異端の驅除	第百十七頁
第六講話	病健兩者の勸戒	第百四十九頁
第七講話	病健兩者の幫助	第百七十九頁
第八講話	祈禱の不倦怠	第二百十三頁
第九講話	聖經の勉學	第二百五十九頁
第十講話	群信徒の模範	第二百九十五頁
第十一講話	靜穩と平和の保持	第三百二十九頁
第十二講話	長上に對する恭順	第三百六十五頁



東
洋
の
召



「神に事へ其榮光を廣め其聖公會に徳を建んが爲め此の勤務を受るに付て聖靈に感ぜられたりと汝信するや」

(聖品デアユノ派立式文)

「汝は我等の主イエス、キリストの聖旨にしたがひ又この聖公會の律法にしたがひて誠にプレスブテロの品位と供事に召されたりと思ふや」

(聖品プレスブテロ派立式文)

第一講話 心衷の召

主に在て相愛する兄弟諸君——過る三日の間我等は皆同一に彼の大問題——基督の教會に於ける聖職——を種々に講究したり。我は此講堂内に於て、朝夕の禮拜に際して、諸君の面前に聖書の部分を講演するに於ても、又我等が従事し來れる一層本式にして鄭重なる研究に於ても、俱に諸君の今より將に就かんとする職務の甚だ神聖なる性質、及び必然之れに伴なふべき重大の危険と非常の福德とを特別にも諸君の前に描き出さんと欲し且務めたり。此事を務むるに當りて我は深く自ら信じて謂へらく、諸君が豫備の要具として、普通の學藝に通じ、且少なくとも幾分か神學上の知識を具へんことは、諸君自身にとりても、また基督教會に取りても、大緊要なりと雖ども、茲に尙一要件の在るありて、其必要たるや他に超て更に幾層深大なる也。他なし、是すなはち諸君が自身の救はれん爲め、又其委ねらるべき聖職を悉く盡し得ん爲めに、主

心衷の召

キリストに對して活る眞正の信仰を有せられん事なりとす。無學無識の教職は何れの教會にも恥辱たる者にして、宣教の功力を損ずるや言を俟たず、然れども不虔不信の教職は動もすれば其燈臺を除かれんとし、其生命を熄されんとす。焉んぞ肅然として戒慎せざるを得んや。是故に我は進んで若干の細目に論及する前に、再び諸君が此に暫く此重大問題を考察せんとを請はんと欲す。今プレスブテロの品級又はデアコノの品級を求むる諸君に向ひて一々に我が其職分として神の御前と其公會の前とに於て問はざるを得ざる第一の問は即ち實際此事を露出し來る。——デアコノたらんと求むる人々には我問はざるを得ず、汝は聖靈に感ぜられたりと信ずるや、果して心裏に聖靈の感動を蒙むりたりと信ずるやと。——プレスブテロたらんと求むる人々には我問はざるを得ず、汝は主イエス、キリストの聖旨にしたがひて誠に此職に召されたりと思ふやと。諸君はまた其見ざる所なき大審判者の御前に在るの心を以て答へざるべからず、我は然か信ず、——我は然か思ふ

兄弟諸君、此問は之を與ふるも畏るべき者、之に答ふるも畏るべき者なり。諸君の答は輕々しく發すべからず、先づ其答へん所は必らず果さずんばあるべからずと知り、再三再四自から省りみ、嚴肅に祈禱をなし、公會信徒の面前に於て、至嚴至正の神(彼の昔聖成せられざる手を伸て單に木石の櫃を扶け支へんとせし人をすら立所に撃ち殺したまひしと云ふ者)の前に立ち——心腹腎腸を洞視し給ふ者、人に對ひて偽るに非ず神に對ひて偽はれる人々を嘗て其凡眼に見えぬ強腕をふるひて端的に殄滅したまひしと云ふ者)の前に立ち極めて莊重に極めて嚴肅に之を答ふるを要す。

諸君が此問に輕々しく或は妄に答へざらん事こそ實に自身の爲にも他人の爲にも極めて重大なる者と謂ふべけれ。是れ他人の爲に極めて重大なりとす、如何となれば、信仰なき懶惰無力の人物が教師となれるよりして世間に蒙むらん不幸——キリストが畏こくも自ら代りて死

第一講 話

し給ひし人々と基督教會の全體とに及ばん禍——は誰か其底止する所を知らんや。——是れ諸君自身[○]の爲[○]に極めて重大なりとす、如何とすれば、此の過謬たるや人間の手段を悉く用ひ竭しても尙補償する能はざる者なれば也。諸君の一たび發したる辭は駟馬も追ふ克はず、諸君が一たび立てたる誓は言もどすを得ず。諸君が聖職に與[○]かる者たる肩書[○]は到底塗抹すべからず。其が唯一の補償は諸君が其任に堪へざる間に不幸にも愨に就きたる職を他日十分に盡すことを得るの程度にまで致々として努[○]め進[○]むに在[○]る耳[○]。寔に神恩の大力なる古來斯[○]の如き奇蹟(驚歎すべき出來事)を屢[○]次[○]おこなひたり、然りと雖も、誰か敢て斯[○]る過分の仁惠を蒙[○]むり得べしと自ら信ずるを得んや。誰か敢て故[○]らに己れの拯救または己れが兄弟の拯救を賭[○]て非分の恩惠を萬一に僥倖せんや。之を要するに是の如き恩助の場合には常に非ず、例外なりとす。通例聖職員は其初の重[○]なる性質を終まで保つ者なり。固より凡て活る聖職員には成長あり、幼稚の薄弱より進みて丁年の剛強に成長し、知識と理會と

第一講 話

勢力と熟練と知見と信と愛とに發育す。但し活ける聖職には斯の如く四方八面に成長ありと雖も、死せる聖職には絶て成長ある無し。後者に於て變化と稱すべきは唯其腐敗の増長する者のみ。全く是れ怨敵が成長を假扮虚擬する者にして、實は基督の公使てふ假面の裏に基督の敵たる魔物を養成する者、私心を其種々の形狀の一——即ち貪婪、或は好色、或は世慾、或は怠惰、或は輕忽の如き惡徳に於て爛熟完全せしむる者、靈魂を縮少し剛愎にする者、良心の全體を鈍化して、終に長夜の眠に沈ましめ、彼の死なず竭きざる蛆[○]の醜形と成るに及びて始めて目醒[○]しむる者、如何ぞ悚然として寒心せざるを得んや。

此運命は是れ不忠信なる聖職員[○]役者[○]が遭遇する常法通規たる也。其人は誘惑者が諸君の耳に密[○]語[○]くが如く漸々自ら改善する者には非ず、却て其聖職に輕々しく飛入りたるが爲に日に月に益々惡しくこそは成り行くめれ。其擔任せる聖職とともに新しき誘惑及び新しき要求其身に到る。——他語を以て之を言へば、其左右に今や新しき危險の來り逼

るある也。然るに其人は右に向ひても左にむかひても俱に恩助を蒙むるを得ず。是に於てか沈淪す、他の人々よりは深く沈淪す、俗信徒として免かれたらんと思はるゝ、罪惡殃禍の深淵に鉛の如く沈淪す。彼が必ず幾分か親炙しをらん聖書の語は、日々に弄する火の如くにして、全く彼が心を頑硬にす、眞神の使命は、屢語れども聽かざるに因て、彼が耳を聳せしむ、審判の幻象及び平安の光景は、常に見ても感ぜざりしに因て、彼が目を盲せしめたり、縦や其禍に沈淪する斯の如く深からずとも、此の大職任を輕卒に受けたる人には尙衆多の小禍の四方より逼迫し來るを奈何せんや、聖職に就ける人々は皆、—— 其中の最も思慮あり最も用心ある者と雖も、—— 其步履を進むるに當りてや、想ふに必らず曉らん我は始めて斯くキリストに從がひし時には何處へ導びかるべきかを知らざりしと、キリストの網彼等を掩ふて、彼等は擒へられたり、キリストの聲彼等を誘ひて、彼等は從がへり、然れども彼等最初は如何にし

て眞にキリストに似る者とせらるべきか、基督の杯を飲み基督のバプテスマを受る者とせらるべきかを知らざりき。此の域にはキリスト一步一步と徐々に彼等を導き給ふ、—— キリストの恩恵は日々に彼等を援けて其苦難に堪ふることを得せしむ。是の如くに扶持幫助せられてこそ彼等は萬事を耐へ忍ぶことを得るなれ。然れども基督を深く頼む無く、殆ど全く基督に遠ざかり了れる人々が此等の試煉誘惑に遇ひ、此の狂風怒濤に襲はれたらん時の焦心苦慮は嗟誰か之を描き盡すを得んや。十中八九斯の如き人々は殆ど挫け了れる心、殆ど斷ち去れる腸を以て辛うじて生命を全たうす、之を譬ふるに彼等は火中に入りて始めて救はるゝ者なりとす。—— されば此答たるや極めて嚴かなる者にして、何人といふとも決して卒爾に發すべからず、之を口に發せんとせば、先づ幾分か基督の徒たるに愧ざる自信と眞實とを以て之を發し得るや何如んと深く自ら内に省みるを要す、是れ吾人の宜しく爲すべき所なれば也。是を以て余は此に暫く此の問題を講究せんと欲す、—— 曰く

如何なる時に我等は此の職任に就くべく、聖靈より心衷に召されたりと信すべき乎。

意ふに若し先づ人々が此職を選ぶの心術中につきて其判然不十分なるが如き道理の若干を排除し去らば、庶幾は此の間に正しく答ふることを得んか。第一に此聖職は、世人が通常の業務を合法に選ぶが如くにして選びては未だ足れりとせざる者なること明かなりとす。例へば單に其榮職にして位階名譽または高俸の屬するあるが爲に之を選ぶが如き、或は其親戚朋友が己れを之に薦めたるが爲に之を選ぶが如き、或は況てや一家の糊口の資を得んが爲め、若くは前途に榮進の好望あるが爲に之を選ぶが如き、況んや又他に従事し得べき職業なきが爲に之を選ぶが如きは、俱に未だ心衷に聖靈の召を感じたりとは謂ふべからず。

以上の件々は、其間に輕重の差別こそあれ、いづれも皆人々をして我は兄弟の番士たるべく、キリストの公使たるべく、神の聖靈の密語を以て

第一講 話

第一

講 話

召されたりと正當に信ずるを得せしむべき理由とするに足らざる者なりと我等は最も斷々乎として明言するを得べし。固より其中の數多は第二の考として入り來らば或は咎むべき無からん。——聖職に従事すべき目的を以て教育を受けし事、敬虔なる父母の我を基督の役者とならしめんと計りし事、自然の天命によりて宗教界に身を投ずるに至りし事、世間の業務に由て豊かに暮さんよりは神に事へて質素に生を送らん事を望む事、——諸々是の如き件々は撰擇を決するに臨みて宜しく参考に供すべき者ならん、然れども決して之を以て根據とはなすべからず。世間の業務の能するよりも一層親密に己れをキリストに近づかしむべき職任に従事せんと欲する事、基督の福音に由て靈魂に齋らされし拯救に感奮する事、キリストの聖名を世人に傳へんと欲する事、人々の靈魂のために憂ふる事、人々を教導するの伎倆ある事、聖書に見えたる所謂番士、家宰、牧羊者、醫者、瓦工師等の願望および性質の若干、——凡そ此等の件々は確かに吾人の胸衷に在り得べき者にして、人

もし聖靈の指導を奉じて進退すと良心に愧る無くして安全に説き得るならば、是れ主の御靈の働を證驗する者と謂ふべし。此等の思想或は願望は發して或は吾等の救贖者たる主に對する一心不亂の熱愛となるべく、或は凡の事に於て主の榮光をあらはさんとの無上の冀望および努力となるべく、其至れるに及びては、嗟我は禍なる哉と歎息しつゝ、恰も閉住たる火の如く父神の深愛、基督の十字架の力、主たる聖靈の醫し且高むる勢を世人に證明し得るに非れば已じとの精神となるべし、否な幸ひにして屢々實際此の如くなるに至るを見る也。斯る場合に於ては神よりの召あるを踪ぬること割合に易し、然れども此等の熱心と無頓着あるひは冷淡との間に横たはれる各段各階の冷熱厚薄強弱、淺深に於ては、果して神の召あるや否やを決定すること極めて難ければ、我は眞に此職を以て神に事ふべく召されたりやとの此重大なる問を發するに際して動すれば躊躇幾十百回ならんとす。此の問に對する答は吾人の心術を精査する事に由て屢々發見し得べしと雖も、人心の自

第 一 講 話

ら欺くや甚だ大いなる者なれば、斯く自ら嚴査したりと信ぜし後に於てすらも、或人は相當の原因なくして或は驕慢し或は落膽するに至る。是故に、我が前途を考ふる時に我が精神は何に最も自然と傾むくや、一我が思想は専ら其安佚若くは室家の和樂若くは榮譽を好むや、又は其刻苦、其基督と交はる事、其神を榮する事、其永遠無窮の冠等を愛するやと問ふことの如きは或は甚だ有用なる者ならんと雖も、又此等の問に對する答は吾人の心狀を幾分か明らかにすとは雖も、此に於てすらも此重大なる問は感情の如何を兎や角と問ふ者に非ずといふを記ゆること特別に必要なりとす。此問は遙かに深く吾人の衷心にまで達する者ならざる可らず。感情の飄然たる空氣は或は夏日の輕風となりて身心を爽かにすべく、或は黯澹たる憂雲慘雨となりて天地を掩はん、然れども中心たる人は精神晏如として浮雲の倏忽たる變化を超脱するあらん。

是故に諸君は須く問ふべし、我は何物ぞやと。而して此事を知らんとせば

第 一 講 話

第 一 講 話

ば是非とも諸君は我が平生の言行何如、我が艱難の時の舉動何如、我が日々の心術および品行如何と顧みざるべからず。又此の反省をなすに當りては想像に係れる艱難に處して我が進退擧止何如なるべきかと考ふる勿れ、今まで實際の艱難に處して何如なりしかと考ふるを要す。諸君は基督の證人として生活しをるや、悪魔の徒として生活しをるや。諸君は怠慢、佚樂、放肆を防ぎつゝあるや、又は此等の不徳に克れつゝあるや。諸君は今其兄弟を誼ひ或は疎んじつゝあるや、又は夙に之が福を祈りつゝあるや。諸君は其主(基督)を愛敬し奉るや。諸君は其罪性の重負に呻き苦しめるや。主は諸君のために其呻吟を歡喜に變じたまひしや、或は將に變せんと約したまひしや。諸君は果して罪の憎むべき者なるを知るや、又罪と戦かふこととの辛艱なるを知るや。諸君の生活は果して基督教徒たる名に負かざる者なるや。諸君は果して恩恵の國に入るといふことの意味を知るや、又該恩恵を力として諸君は沈淪者を彼等と諸君との主たるキリストに挽回せんことを欲するや、現在の地位に在

第 一 講 話

て諸君は其言行を以て神を榮せんと求めをるや、今諸君が基督の内廷に特に奉仕するの職を選べる大目的は果して今よりも幾層饒かに基督を榮せんとするに在るや。是れ諸君が力の及ぶ限り審かにせざるべからざる要點なりとす。基督を榮することをして諸君の大目的と爲すべし。基督の恩恵が諸君の心に徹したるの淺深に隨ひて諸君の目的にもまた大小ある者とす。諸君に於て若し果して然らば諸君は確かに信じ得べし。基督諸君を高等の職位に導きたまふと、基督は必ず諸君を召たまふ。諸君は敢て應ふるを得べし。——基督は必ず諸君を遣はしたまふ。諸君は敢て行くを得べし。諸君は基督の箴に在る銳利疾速の矢の如くなるべし。彼の日に諸君は忠信なる牧者の冠を與へられん、而して其冠の光耀は尋常の基督教徒の冠よりも幾層赫灼として輝やかん。是實に諸君が望み得る所なりとす。

以上は諸君が此聖職を任ふべく果して聖靈なる神より心衷に感動せられたるやとの一般の問に答べき材料につきて一言せる耳。然れども

該問につきては尙一點の考ふべき者ありて會長派立式文の中に明言せられ、又會吏派立式文の中に寓して見ゆ。因て今少しく該問題に諸君の注意を喚ばんと欲す。彼の式文中には明らかに問ふて曰はずや——

「汝我等の主イエス、キリストの聖旨に循ひ又此の聖公會の律法に循ひて誠に會長の品位と供事に召されたりと心に思ふやと。此問に對して呈する答の中には必ず諸君が今其役者とならんと欲する公會教會の品位誠規及び教義に十分満足したりとの意を合著す。諸君は則ち之を基督が此地に植たまひし聖公會の眞派として其性格と其職任とを全然信用して毫も疑がはざる者とす。此問の前半は諸君が基督の役者たるべく心裏に召されたるや否やを試み、後半は諸君が今聖品を志願する其公會に役者たるべく召されたるや否やを驗す。諸君もし其公會の性格の眞否を疑がふならば、若し其公會の大綱を解釋すること諸君が教誨の準則として示され、任職の要件として授けられたる所と相乖き、全く自家の意味を之に附し、隨意の解釋を之に施としつゝも、故らに承

認の記名調印を之になさんとするならば、是れ眞に虚言矯托を以て教師の職を買はんとする者と謂はざるを得ず。斯の如くしては安んぞ諸君の前途に神の祝福あらんことを望み得んや。此等の言語は或は矯激に失するの觀あらんと雖も、不幸にして此に必要なるを奈何せんや。從來此の事件に於ては多分の努力と非常の籠辯とを以て是非を曖昧模稜ならしめたるとありしを以て、今や聖職(聖品)を授くるの預審として、賛同承認を志願者に要求すべき任を帶たる人々は、此點に於て甚だ心苦き迄に明細ならざるを得ず。固より我は小心翼翼たる賛同承認の規矩として我が大綱中の一々の箇條に對して全然たる唯々諾々の畫一なる見解を持せよと要求するほどに甚だしくは敢て本則を強解せんと欲するに非ず。斯の如き狹隘の舉動は我が教會の廣量と智慧とに甚だ似ざる者とす。是れ我が教會は古來常に第十七條を見よ、幾分の——否な頗る大なる——自由を萬殊の人心に與へたれば也。然れども、我は吾が判断を此に反復す、諸君は其精神と意見との大體の調子と主義

第一講 話

とに於て、大綱三十九條の明示する所及排斥する所を其解き聞かざるゝ意味にて、徹頭徹尾衷情より承認するに非れば、到底眞實には我が公會の教義に賛同するを得ず。又我は信ず諸君は斯る重大の時機に於て斯る文書に遁辭と半吐とを以て承認賛同の記名捺印をなすほど深く己れを害する事はある能はず。意ふに世人若し其教師たる者が口には是とする所を心に非とし、其教ふる所の事と其信ずる所の事とを異にすと猜がふに至らば、基督教會の之が爲に蒙むらん恥辱は極めて甚だしくして、其害の大なる何物か之に若んや。

兄弟よ、此等の諸點にして已に明らかならば、我は進んで二三の勸告を諸君に呈せんとす。是れ諸君をして其將に小心翼々として——深く學びて穩かに定まれる良心を以て——従事せんとする此聖職を盡さしむるに與かりて幾分の助となるべければ也。

固より此廣大なる問題を此に詳論せんことは到底能くすべからず。神もし許したまはば、我は其中の重大なる若干點につきて明日諸君の前

第一講 話

に聊か講ずる所あらんとす。今此には只明日の場合よりは今日の場合に適するが如き委曲の細目につきて幾何の考案又は注意を諸君に陳述せん耳。

第一、請ふ我をして其嘗て諸君に告たりし所の事を此に反復せしめよ。諸君もし忠信ならんと欲せば、其衷情よりせる剛毅の信仰が果敢なる非常の克己に召されつゝ、日々試みらるゝが如き生活をなさんことを深思熟慮の上にて堅く決心せよ。諸君の唯一事業は人々の靈魂をキリストに挽回するに在り、諸君の周圍における交際社會の顔面上に或る一般の改良を生ぜしむるが如き皮相事業には非ず、神の用ひたまふ機械として、キリストの御名の力に由て、活靈魂上に其眞箇の感化てふ大奇功を奏するに在りとす。其惹き起さん思想は如何に苦々しき者なるにもせよ、決して左の眞理を忘却する勿れ、即ち凡そ諸君に委ねられたる靈魂(人々)にして一人たりとも諸君の教導に由て主に歸向せず又は主の聖道に進歩せざる者あれば、諸君の事業は失敗にして諸君は其

職を曠うしたる者と謂はざるを得ず。嗟此の如き事業は如何に勞苦と克己との満ちたる者なる哉。彼の所謂勇士フレイムは諸君をして其家を奪はしめず、安全に其室に坐しをらん。而して彼は日夜攻撃と謀略とに忙がはし。諸君まづ眠るに非れば、彼は決して寝ねず。然れば請ふ先づ抵抗のあらんこと、反對に遇はんことを覺悟せよ。

第二には、凡て此等の事に於て諸君は實地に爲すべきの事ある者なるをおぼえよ。諸君が出で、公會員を訪問するは、單に其の牧する信徒と相見て閑日月を消するを要するが故に非ず。是れ一に彼等が靈魂を有するに因り、又諸君が薄弱なる者ながらも、基督の力に由て彼等を救ふて永遠の猛火を免かれしめんとの重任を帯びたるに因る者とす。此の精神を以て宜く訪問に出づべし。而して信徒と相語る時には、只十分間ばかり懇懃懇款の辭を以て彼等の家族業務健康等を問ひ、最後に儀式の祈禱を以て鄭重に別を告るが如き死文然たる閑事業に流れんことを慎しめ、請ふ却つて自ら心の中に謂へ、今我は神よりの或る眞理を

第一講 話

以て此人の心を貫かざるべからずと。彼等信徒に對して熱心なれ、眞面目なれ、彼等の鐵子を打回めんと欲する者の如くに奮ひて擊て、否な擊て之を其中心にまで貫ぬけ。諸君説教をなすに當りて熱心なれ、戲弄を維れ事とする勿れ。諸君が牧養する信徒の員數と必需と危険と器量とを常に眼中に置け。諸君の力を銜ふに非ず能く彼等を裨益するが如き題目を選べ、而して明瞭勁健熱烈なる辭を以て一直線に彼等に談ずること譬へば諸君が己れの生命を乞んと欲するが如く、其子を訓戒するが如く、又は其刎頸斷金の友を猛火炎炎たる家宅の中より呼出すが如くにせよ。諸君が斯の如く熱心ならん爲に我は諸君に忠告す、請ふ最初よりして成べく他人の説を借る勿れ、諸君の説教は諸君が自ら跪拜の際に、又は其聖書中より、又は自省反顧の時に、又は其群信徒間に在て、學び得たる眞理を以て成立つを要す。諸君の説教を斯の如き者とならしめんには、千思萬考せよ、決して勞を惜む勿れ、神と人どに與ふるに諸君が時間の削屑カクシ若くは他の職業の殘餘餘暇を以てするを慎しめ、有害な

第一講 話

第 一 講 話

る輕便法を避けよ。諸君の信徒如何に貧賤無識なりとも、必ずや鄭重に構思せる説教と鹵莽に組立たる説教との別を辨へん。然れば諸君の説教題を周到に思考せよ、若し能すべくんば日曜の晩に其翌週の日曜説教題を定めよ。而して公會員を訪問する途上且歩み且之を默想せよ、之をして有功ならしむべき力を神に祈れ。然らば諸君聖書を讀む時、又は公會員を訪ふ間に、自然に豁然として發明する所あるべく、例解おのづから胸に浮び、適用ひとりで思ひ出らるべし。是に於てか諸君の筆を執て之を書くや、淋漓として龍蛇を奔らせ、秩然として首尾貫通せん、是すなはち有力なる者とす。各箇の説教をして只一題に止まらしめ、善く之を分段し、周到に之を敷衍せよ、其全體をして専ら磔死の基督を群信徒の面前に崇むるの最大目的に向注せしめよ。萬福なる神が自身につきて吾人に教へたまひし眞理を繰述せよ、墮落し且誘惑せられたる吾人の朽墳爛屍中に始終彷徨することとを避けよ、超然高飛して神と基督と聖靈とに到り、群信徒を諸君と與に率ゐて彼處に上れ。聖靈の力に由

て彼等を彼等自身の爲に導びく事、無始無終の御子を信ずる事、及び斯く御愛子の功に由て嘉納せられて御父の前に立つ事——是即ち永生たるなり。

但し我は重ねて此に言はんとす、諸君の聖職は直ちに之に従事するとを始めよ。諸君が懐いて以て之を始めたる精神は蓋し始終諸君の胸中に存住せん。然れば諸君は其之を終へんと欲するが如くに先づ之を始めよ。最初より諸君の大危険——猶豫緩漫、不熱心、單に職業的なる禮貌、怠惰、自適等の短處——を禦ぎて戦かへ、之に克制せらるゝ勿れ。請ふ基督の十字架に近づけ、彼の釘痕を仰げ、而して其傷創の上に於て罪の何物たるかを見、又諸君が主の愛の如何に大なるかを見よ、主に贖なはれたる罪人として諸君はまた主に贖なはれたる罪人の爲に奔走努力せよ。請ふ諸君の火盤(香爐)を執り、奔り、奔り、既に死ぬる者と尙ほ生ける者との間に立て、疫病すでに始まりたれば也。

兄弟諸君の中、中學校の講師に任せられんとする人々に向ひても亦特

第一講 話

に一言を呈せんと欲す。其の誓願は同一なりと雖も、諸君の職務は或る重要な點に於て牧會教師とは大いに其趣を異にす。固より諸君もまた一たび之に任ぜらるゝや直ちに宣教師となるや言を俟たず、教授に従事する人々は其群ぐんを學生の中に發見す。其同胞基督教徒を薰陶すべき重任を帯びたる者として、諸君は其爲すべき事極めて多し、決して單に哲學を講教する者たるに止まらず。然りと雖も尙諸君の職分と諸君の誘惑とは他の教職諸君と大いに異なる所の者ありとす。人口稠密の教區に在て千差萬別の急切なる靈用に應ずるに忙がはしき人々よりは、諸君は遙かに餘暇多く、障碍少なし。諸君の宜く爲すべき所は蓋し左の件々を以て之を包括するを得ん歟——諸君は祈念に多く力を用ふるを要す、諸君が群衆間にはたらく兄弟たちに於けるは、山上に騰れるモ一セが平原に戦かへるヨシニアに於るが如し。然のみならず、諸君はまた深く神學を究むるを要す。國中に基督教的學問の調子を高め光輝を耀やかすは諸君の任なるぞかし。此事の大切なるは唯に(或は専ら)諸君

第一講 話

が容易に反對論者の口を箝するを得るが爲のみならず、又是れ神學の箇々別々なる諸般の事實および陳說の裏面に高尙完全なる學理的一致の伏在するに因て然る者とす。此事の知識は之に通達せる人々をして眞理の衆部分間に於ける比例わらひを燮理するを得せしめ、關係を顯彰するを得せしむるに最も重要な者と知るべし。此等の特別なる職分果して、中學教職の身に屬すとせば、其人の特別な誘惑もまた同様に著るしき者と謂はざるを得ず。即ち茲に先づ偷安及び自恣の生活に流れしめんとする普通の誘惑ありて、其人を待つや頗る強し。是に於てか動すれば彼等は或は其粗大なる形に於て日々に美味を食ひ佚遊に耽り、或は其精微なる形に於て單に智力上の快樂を追つゝ、蠶魚と日夜相伍せんとす。此等の危険の外ほかにも亦他の危険の伏する無きに非ず。煩忙の世を去りて思想界の書齋に閉こもれる人々は未だ久しからざるに早くも認むらくは、彼等が世間にて避て逃れ來し悪魔復も無人の曠野にて彼等に迎へ遣はん爲に先だちて旅行しつゝ、

ありど。是の如き例世に極めて多きを奈何せんや。自負空論に耽る事、危言を愛する事、其兄弟と離るゝ事、漸々に暗む眼に朦朧たる幻影を認むる事、段々に狭まる心の非常に鼓動する事、異端、分裂、不信、棄教、墮落——此等は不謹慎なる基督教學者にとりて特別の危険なりとす。昨今に於ても或人々の如きは我等の傍にてすら斯の如くして如何に深く墮落したりしか諸君の皆熟知する所なり。彼等は我等のために鑑戒たる者なれば、我等は其路を行くに方りて須らく、誇ること無くして自ら戒懼べし。恐らくは我等も亦彼等の如く其少しく前まで獨特の明快を以て辨駁するを得たりし謬見邪説を後日に故らに採用し、終には限なき懷疑の翼に乗じて千尋の深きある迷信の底に飛いるに至らん。

我が兄弟諸君、世間に於て、或は書齋に於て、諸君の干城は何處にありや。唯是れ主の擁護中に在り得べき而已、此主は即ち曾て都城に於ても曠野に於ても、殿堂の巔に於ても、均く其敵を叱斥したまへり——唯是れ、主が我等の靈魂とにも居たまふ現前中に有り得べき而已、此主は即

ち我等の性質を帯び且我等の沈淪を救ひたまへり——唯是れ主の永遠なる御靈の間斷なき指導中に在り得べき而已、我等もし赤心を以て日夜主を求めなば、主は我等の一人をも棄たまはじ。唯請ふ我等は無辜なる小兒の如き信頼を以て其靈魂を主に托し奉らん、主の御約束は則ち我等のものなれば也、曰く——爾死に至るまで忠信なれ、然らば我生命の冕を爾に與へん。

第 二 講 話

神
の
榮
光

「神に事へ其榮光を廣め其聖公會に徳を建ん
が爲め」

(聖品デアユノ派立式文)

第 二 講 話

第二講話 神の榮光

基督に於る兄弟諸君——我は諸君の嚴肅なる派立式に於て公會が諸君に呈する第一の問にむかひて再び諸君の注意を喚ばんと欲す。公會が之を爲すの目的は諸君が其志願者たる聖職に適することと、其問と諸君の答とに由て公然と證驗せんとするに在るなり。諸君定めて記憶せらるゝならんが彼の問には言らく、汝は神に事へ其榮光を廣め其聖公會に徳を建んが爲め此の勤務を受るに付て聖靈に感ぜられたりと汝信するやと。此問の第一にして且最も直接なる目的につきては、——即ち諸君をして我は此任に就くべく、聖靈の召す所となれりと信ずると良心に毫も愧る無くして眞面目に明言するを得んには果して如何なる條件を盡すを要するやといふ事を思惟せしむる事につきては、——余は第一の講話中に已に詳説せし所を以て足れりとして、此には更に何をも加へざらんとす。但し此問中の第二なる最も緊切なる部分にし

第二講 話

て尙未だ十分に説き盡さざる者あれば、今此に諸君の注意を該の問題に惹かんと欲す。是即ち左の文字——「其榮光を廣め其聖公會に徳を建んが爲め」といふ言語——の中に含まれたる者とす。此等の言語は諸君が凡の事に於て其精神の目的とすべき者を指せるなるや一目にして瞭然たり。此事につきては諸君其初めて聖職に就ける當時に於ても、爾後之を執行する生涯に於ても、俱に萬事に超えて非常の自省と非常の警戒を要し、非常の勞心と非常の祈禱を要す。

此問題を諸君とともに講究するに當りて、我は諸君が先づ、此問題の最重要なる所以を我と共に少しく考へられん事を請ふ。是れ第一には志の正しからざる時は吾人の勞をして悉く虚しからしむる者なるに因て然か切要なる也。吾人が職任の他人に及ぼせる影響上に於て此缺點(志の正しからざる事)は終に吾人の殆ど預想し得ざる度にまで此事を爲す者とす。自然の原因よりしても此事は然らざるを得ず。志の純潔にして眞摯なるときは其美德を全體の生活に加味するに至るが故に、

第二講 話

其一舉一動悉く氣力盛にして敵對を破壊するに足るべく、同時に又一言一行悉く愛忍強くして他人を懷柔するに足るべし。此の美德は假扮すべからず、之が偽物は終生斯の如き好結果を生ずるを得ざる也。之に反して衷心に安置せる光は全身に遍滿し、煌々として四肢百骸より恒に發射し來る。是を以て吾人の大任を單に其自然的なる方面より觀察しても、此力の缺乏は他に之を補ふに足る力あるを見ず、實に此力の缺けたる以上は、生靈をして我が主の輓に甘服せしめんと務むるに當りて到底功を奏せんことを期すべからず。然のみならず我等が聖職の此單に自然的なる方面を考ふる事より轉じて、我等に一切の力を與へ給ふ聖靈なる神の我等と俱に在す事に思ひ到るならば、此真理の益々明々白々なるを感ぜざるを得じ。其故何如んと問ふに我は斷言す、——

神は或は悪人を用てすらも肯て其大能を天下に行ひ給はん、預言者たちの中にも或はサウロあらん、不潔の口舌より發したる辭にても、或は聖靈の力に由て聽聞人の心に感徹しつゝ、之が罪惡の睡を醒すあらん、

第二講 話

然れども是は神の常道に非ず。固より基督の委任を帯べる以上は、不潔なる教師の執行したる禮典或は職務も、其主任者の不能なるが爲に効力を失ふ者に非ずと雖も、是の如き不能は彼等が罪人の心を感化し、聖徒の徳を建立せんために神の語を奉行するの力を損ずるや極めて深し。是れ第一には神の力は是の如き偽善者の身上に宿らざるに因り、第二には我等の聖職の此部分に於ては神我等をして己れの徳行を用ひて其兄弟の爲に徳を建てしめんと欲したまへば也。是を以て預言者の目は朦朧と曇り、預言者の聲は其清朗を失なへり、是は罪多く彼れに膠着して其靈魂を汚晦したれば也。

但し我等が聖職に従ふ志の正しからざる事若し斯く直接に我等をして他人を教化するに堪へざる者たらしむるならば、其我等自身に對しても然らんことは、更に幾千倍も甚だしと謂はざるを得ず。斯の如き役事は神の震怒を惹くこと大ならざる可らず、神は心腹腎腸を探りたまふ者なれば也、神の眼中に於ては吾人が一言一行盡く其動機および心

第二講 話

術を以て色づけられて見ゆれば也。されば此の如き教職は神の御目に果して如何なる者と見ゆべきか。諸君請ふ其聖職の甚だ尊きを想ひ見よ、——是れ神に代りて人々に語る也、是れ復とは得がたかる短き生に在て將に死なんとする人々に神の金口よりせる拯救の使命を齎らす也。是れ斯る人々に基督の十字架を語る也、彼等を贖ふ爲に基督の寶血を流し給ひし事を語る也、基督の苦悶と血汗とを語る也、基督の受苦及び死等凡て斯の如き最も大いなる又最も畏るべき事實を語る也、此の如き責任と此の如き結果とを有する此の事業に従ふ者にして、之を見ること宛がら由て以て小利を獲べき事件の如くし、由て以て自家の眞器量若くは假器量を衒ふべき事件の如くし、由て以て激發せる感情を縱まゝにすべき事件の如くし、其甚だしきに至りては、由て以て一時の喝采を博すべく、惘然の虛榮を滿たすべき事件の如くせば、嗟之を何とか謂はん。兄弟諸君、神の使者にして斯く其主を榮すべく兄弟を拯ふべき高大の目的を此等の汚穢または卑陋なる心術と交易し了らば、其内

第二講 話

心の腐敗は如何に深かるべきぞや。斯る教師は未來の寶藏に蓄へられて基督の忠信なる役者を待てる大報賞を受べき望を如何に必然又全然永久に抛擲し去れる者ぞや。縦や彼が剗切なる説教に由て罪人は救はるとも、己れが他人に告げたる儆戒を己れ自らは度外に置きし彼には是果して何の福ぞや。縦や彼他人の目を基督の十字架に注がしむるを得たりとも、自ら愛慕と信賴の熱眼を絶て之に注がざりし彼には只是れ幾層重大なる罪となり、幾層嚴峻なる罰を來さん而已。假令苦勞すると最も多く、危険を冒すと最も勇ましく、艱難に耐ると最も強く、罵詈訾を泰然として忍び、殉教者の火刑をさへも終に蒙むるに至りたればとて、此等の事皆もし自己の榮譽を得るために爲したる者にして、彼の吾人を其實血の價もて購ひ給へる者の足下に謙りて恭く獻げたるに非ずば、其人に何の利益があらん。彼の凜然たる基督の反語は斯の如き人々につきて怖ろしくも應驗したりとや言はん。——「彼等は既に其報賞を得たり」(馬太六の十六) 請ふ想ひ見よ、斯の如き人は吾人各箇の前

第二講 話

途に在る彼の至嚴至密の大審判日には如何に赤裸に視がるべきぞや。嗟斯の如き表面の役事は、彼の時に其取にも足らぬ虚榮心を凝視ん火焔なせる眼光に遭ふては如何に縮みあがるべきぞや。諸君よ請ふ臍を噬むの悔なき間に早く試みに思へ、彼の怖ろしき日に諸君が「主よ我は主の名に託て鬼をおひ、主の名に託て多く異能を爲しに非ずや」と曰はん時に、否な「我嘗て爾曹を知らず惡をなす者よ我を離れ去れ」と答へられたらば果して何如んと。

此事の我等に極めて切要なるは、亦是れ我等が特別にも此誘惑に陥り易き故に然る者とす。而して此誘惑たるや其來る道蓋し一にして足らず。第一には我等が職務の性質やがて我等を此の悲むべき墜落の淵に臨ましむるを奈何せんや。此世の尋常なる業務に従がふ人々は、割合に之を言へば、我は日々の家業に神を榮せんことを志し、つゝありと虚妄不實に信ずべき誘惑に遭ふこと極めて少なし。彼等の周圍なる群衆は公然また直然と或る名利の爲に己れと同じく奔走す。其遑々汲々とし

第二講 話

て求むる所は或は大いに富まんとするに在り、或は大いに貴からんとするに在り、或は大いに名を揚げんとするに在り、——或は家を興さんとするに在り、或は財産を作らんとするに在り、或は其國の青史に名を垂れんとするに在り、彼等の功名心は其間に或は多少の高卑あらん、然れども皆自白的に此世に專屬す。彼等は其名奔利走中に上帝の榮光を進めんことを目的としつゝ、ありと想像すべき誘惑を有せず、却つて自ら謂へらく其生活の此等に関する部分に於ては此の如き目的を懐くこと難しと、即ち彼等は自ら信ず我が宗教は全く我が家業と相分かる、而して家業は上帝の榮光よりも他の直接なる事物を目的とせざるを得ざるが故に、之を目的としても當然なりと、然れども我等に於ては然らず。我等が誘惑の狡猾にして見がたきは此に存す。我等の言動——我等の職務上の言動は盡く神を榮するためと稱せらる。是を以て我等は、毫も斯る志なき時に於てすらも、勿論斯る目的を懷きて萬事を行ふと自ら断定するが如き危険に動もすれば陥らんとす。其行動自身

第二講 話

は如何にも正善にして、神の榮光は如何にも之が直接の目的なるが故に、——其行動にして宜きを得だにせば、——或る卑陋なる利己の心術ありて徹頭徹尾これを汚しはせざるや否やを發見せんには、眞箇に虚心平氣の自省を要す。斯の如く他種の人々よりも超えて我等は憫むべき自欺の犠牲とならんとする危険極めて多しとす。

請ふ、聖品を始めて求むる者を以て之を例せん。——茲に一少年あらんに、其人は朋友(多分敬虔なる人々)の力に由て教職となるべく定まれり、彼は生來温和にして、邪蹊に陥るべき野心を有せず、又崎嶇多難なる生活に投じて立身出世の競争に従事するに適するほどに強勁なる品質をも有せず、早くより専門職業として聖職に従ふべき者とせられ、其然か定められたるを見て之に黙従し、遂に成長して十分に體面ある人となれり、然れども其身には一も判明なる宗教上の特色と見做すべき者なく、信心の著しき相貌と稱すべき者も見えず、只キリストの見證者なりと云ふの外には毫も熱衷なく、若われ福音を宣傳へずば實に禍

第二講 話

なりといふが如き堅志なし、但し教師の生活は彼れの身に適す、彼は世を裨補せんとを希望す、身邊に安樂を招かんと欲し、社會に紳士の地位を得んと欲す、此世の富貴を萬一に得べき望を棄てし代りに上流社會に容易く好地位を得んとを求め、間善くば早く妻を娶りて無事の樂を享受せんとを冀ふ、此等の件々は其れ自身に於ては毫も非難すべき者にあらず、然し乍ら考へ見よ、此少年は自ら、我は神に事へて其榮光を進め又其聖公會の徳を建ん爲に此の職に就くべく聖靈に心衷感動せられたりと信ずと明言するに非ずや、是れ眞なりや、彼は斯の如き事件のため其命を獻ぐる人の思はざるを得ざる如く、本件に於て果して其满腔の熱心を以て、神の榮といふことを思ひたるや、果して彼は恭しく禱り、深く自ら省みて其神に事ふるの榮職に身を委ねしや、キリストの愛果して彼を強て奮起せしめしや、哥林多後書五の十四を見よ、嗟哀い哉、幾多の場合に於て(即ち幾多の人物に就て)我等は否と謂はざるを得ざるぞや、然らば何が故に斯る人々は自ら己が口に唱へつゝある所の

第二講 話

事の不實なるを曉らざるや、意ふに是れ其務自身甚だ善き者と見ゆるが故に、彼等みづからは是は神の榮光の爲に爲す者なりと一圖に信ずるに因るなるや殆ど疑なし、彼等は蓋し思へらく、此等の言(問詞)は教職全體を描ける者にして、自身は唯其中の一員のみと、然れども彼等は自ら欺かざらんと欲せば必ず先づ一己に神に忠信ならざるべからずと云ふ事を思はざる也、是に於てか彼等は迷妄の思想を懷きて相率ゐて其聖職に就くに至る、而して此迷想たるや此世に於ては終に覺ざる者甚だ多し、豈慨歎にたふべけんや、彼等は説教す、パプアスマを施す、病者を訪ふ、問答を教ふ、聖餐を執行す、然れども是れ一般の人々が銀行へ往くが如く、法衙へ往くが如く、議會へ往くが如く、只之に因て生活せんとする耳、之に由て品格を保たんとする耳、然るに其職業として行ふ所が盡く敬虔の外觀あるを見て、毫も然か思惟すべき道理も無きに妄りに自ら我は神の榮光を進むる爲に生活すと言ひ、其確乎たる報賞を受くべきの途に在りと信ず、何ぞ誤まれるの甚きや。

第二講 話

加旃、假令我等幸ひにして此誘惑の表面粗大なる者を脱し得たりとも、他の道理に因て尙一種特別にも之が攻撃の衝に當るを免かれず。今茲に入あり、眞箇に善美なる根據と眞箇に敬虔なる堅信とを以て聖職に就きたりと假定せよ。彼は其贖主たる主を愛し奉ることを其の十字架の下にて學びたる者にして、眞に其心の底より主にむかひて、主よ我が爾を愛することは爾知れりと言ひ得る者なりと信ぜよ。——彼は此の誘惑を免かるゝや、諸君もし此誘惑の狡猾なるを十分に知悉せんと欲せば、請ふ思想を以て彼れの後に従ひ行きて彼が牧會事業を視察せよ。彼は主を榮する事と魂を救ふ事を目的として其聖職に就けり。彼は其事業に熱心す。彼が感情は其事業に飛動す、而して彼が危険は即ち此に存す。彼は密かに、——己が心にも告白せず、——漸々と其感情を満足せしむる事を先にしつ、其眞正の目的たる神の榮光をば之を後にす。彼が然か満足せしむる感情は其周圍に敬虔の紅霞を環らすこと甚だ厚きが故に、彼みづからは全く其危険を覺えず。然るに狡猾なる敵は

第二講 話

彼が弱處を窺ひ、彼が最も強大なる誘惑を以て來り逼るを奈何せんや。即ち彼は同情を熱望す、愛情に熱衷す、而して此等の者を獲ると感ず、而して此等の者は彼が目的となる、而して彼は段々に此等の者の爲に説教し、此等の者の爲に役事し、此等の者を盛んならしむべき事を説き、此等の者を危ふくすべき事は黙して言はず。彼が今目的とする所は此等の者のみ、神の榮光には非ず、是に於て彼が職任の生命および實體は煙散霧消し去る。

否な、今一層惡き場合を學んに、——假定せよ彼は雄辯あり、學力あり、夥多の信徒其講壇の周圍に輻輳し、學者も虔信者も均しく彼が牧會宣教の伎倆を稱讚す。是に於てか彼は愈々此俗人の歸依を増す様に教を説き、愈々此等の賢明なる推薦を高むる様に職を行なふに至る。其言辭に於ては益々明白と單純とを失なひ、其行爲に於ては其れ自身の爲に基督の十字架を信徒の眼前に掲げ出さんと求むること益々少なし。彼は奏功に注目す、然れども自己の身上に起りつゝある變化をば殆ど知ら

第二講 話

ざる者と謂つべし。彼自ら謂へらく我は基督のために靈魂を瀕まどると日に月に益々多からんことを欲すと。恒に種々の甘き口實ありて彼が不忠信に流れ往くの罪を蔽ふ。悪魔の狡猾手段は彼が力の防ぎ得る所に非ず。是に於てか彼の嚮に我は神の榮光と靈魂の拯救を求むと誓ひし者今は脆弱はくわき世間の人望を専ら求むるに汲々たる俗物と化し、一に神より來る榮譽を求むることを措きて單に世人より榮譽を受くる名利の奴と成りぬ。

否な、其誘惑は尙是よりも粗大なる者あらん。彼は最初薄給の牧師職につけり、素より金錢は彼が慮りし者にあらず、當時は専ら人々を教化せんことを希へり。然るに厚給の牧師職求めずして來れり、次で又一層厚給なる者來れり、而して前途には益々榮進の門開けたり。是に於て彼は竊かに其職に冷淡なる者となり、次第に怠慢に流れ、貴顯紳士學者等中等以上の者に非れば之を遇すること漸く疎略ならんとす。今彼をして其最大の奮發心を鼓舞せしむる者はもはや以前の如く貧者の爲に力

第二講 話

を盡すの福(満足)には非ず、嘗て其主の恩寵を渴望せし者今は世間の卑俗なる事物——金銀財寶爵位秩祿——を其報酬として受るを以て足れりとす。

諸吾人もし斯の如く此誘惑の陰險なる攻撃の衝に當る者ならば、宜く初より特別にも之が危険を預防すべし、因て彼の預防を維持するの方法につきて我は結末に一言せんと欲す。

第一に我等は其危険を見ざる可らず、悪魔が我等に勝つは、我等が其職業に屬する宗教的なる行事を箒笠として此危険に目を閉て見ざるに職として是れ由る者とす。是故に我等一たび目を開きて悪魔の攻撃を十分に見る時には、是れ其攻撃を打破るの途に上れる者とこそ謂ふべけれ。

第二には深く自ら警めて之を防ぐを要す。之を防ぐにあたりて最も幫助となるは、毎日其諸般の行動を嚴かに神の榮光に専ら供し奉るに在りとす。朝騰に於ては心中に竊かに願はくは我が志を終日潔よからし

第二講 話

め給へど切に神に求めずしては其屈めたる膝を伸ぶ可らず。我等の憫笑すべき利己の心、我等の虚榮、我等の卑俗なる志望等若し矯正すべく或は抛棄すべき者ならんには、聖靈なる神の直接なる教誨と幫助とに由て之を矯正し或は抛棄せずんばある可らず。而して此の教誨と幫助とは我等斯く切に之を求むるならば、與へらるべし。斯の如く我等は悪魔と相對立す、而して彼其誘惑の腥さき氣を以て我等の耳に其毒言を密語かんとて來る時には、我等が已に終日を肅んで神に獻げつゝ之が榮光を進むるに致々汲々として餘念なきを見ん。

然し乍ら單に此に止まらず、斯の如く神に獻げたる其一日の中にも、——最も繁忙なる職務に従事する最中に於てすらも、——我等の凡て爲す所凡て企つる所を徹頭徹尾神の榮光に供せんとの誓願を時々尋ぎ、刻々に新たにせざるべからず。凡そ新たに事に着手せんとする時は、及ぶだけ先づ退いて一考し、矢の如くに射あげたる冥所獻禮を以て必ず神に我が之に着手するの志を潔きよからしめ、我が供獻し奉る所の

第二講 話

者を嘉納し給へど願ふべし。我等の最も直接なる宗教事務に於ては此精神を弛むべからざるは勿論、須く却つて益々致々として之に従事すべし。如何となれば宗教的行事は即ち誘惑者にとりては乗すべき機會にして、我等にとりては最も備なき城門なれば也。此は是れ鎧甲中悪魔の矢鏃が最も裏かき易き弱點なるぞかし。されば説教せんとする前、祈禱せんとする前、聖餐を執行せんとする前、病者を訪問せんとする前、聖書を學ばんとする前、説教を草する前、我等は必ず先づ神の御前に心胸を打開きて衷懷を吐露し密かに禱りて言ふべし、——願はくは我が主に此事に於て我をして眞に主の榮光を目的とせしめ、幸ひに悪魔の詐術に陥るを免かれしめ給へ。

然のみならず我等はまた事を成したる後に於ても屢其之を成したる精神を自ら吟味するを要す。神を悦ばせんとして始め、已れを榮せんとて進みはせざりしか、初は神を悦ばせんことを目的とし、後には已れを榮せんことを目的とはせざりしか、心裏の傲慢或は熾盛なる虚榮心を

第二講 話

標する——纖微にはあれども亦容易に見分つを得べき——證據を踪ぬ得ざるか、假令公然と我等自身および我等の行爲につきて直接に誇る無くとも、時々我等の頭上に觸れ、我等の長處および成功に止まるを得る様甚だ己れの身に接近して飛翔することをば好まざるか、或は人々をして己れを譽めしむる様に言談せざるか、好評判の到る時には耳を挖りて之を悦び聽かざるか、——此等の諸事は皆仔細に穿鑿せずんばあるべからず。

且又若し此等の徵候または何にまれ是と同様の症狀上に於て我等若し惡疾の萌芽を發見し得ば、之を療治すべき良藥を求めざるべからず、——即ち宜く神の御前に一層深く謙るべし、己れの卑微薄弱なるを十分に告白すべし、利己の惡徳を脱せしめられんことを切に神に禱るべし、前回我等を陷阱に誘ひたりし交友名利思想等に對しては更に幾層の警戒を加ふべし。然のみならず此等の誘惑には我等の弱處を特に衝く力ある者なるが故に、之と輸贏を争そふだも甚だ危ふし、我等の心

第二講 話

の頼み難きや、其克制せんために面する自尊の思想中よりすらも有毒なる愉快を吮ひ得る者なれば、靈智の一部分として我等は他種の良藥を備へて以て誘惑の來り逼るを須つを要す。其特別なる一療法は蓋し茲に在り、——或る成功に際し、若くは或る稱讚に遇ひて、自尊の念勃々として腦中に起らん時には、直ちに退いて以前の大失敗の二三を回憶せよ、而して想ひ見よ、若し我等が感ずる内部の惡念を悉く心眼に描き出したらんには、此の如き稱讚は、之を口に發する人々にすらも、如何に不適當と聞えんかど。——或はまた此の如き時に於ては直ちに心眼を我が主の十字架に轉ぜよ、即ち縦し一瞬間なりとも、我が主の釘痕ある御手を凝視し、其絶命の御聲を聞き、而して深く憶念せよ、主は我等に固着する彼の罪の爲に此苦痛を蒙むりたまへりと、然らば自尊の迷霧或は蕩然として消えなん。

最後に尙一事を説かん、——我等もし主の面前に在るが如くし、主の慈悲山海なれども又能く心腹腎腸を洞見する炬眼常に我等を照覽すと

第二講 話

思ひて、肅んで進退言動せば、庶幾は此等の狡猾なる誘惑を免かれん歟。此事を憶ふ時には驕慢は起る能はず。盲然たる自愛の念は吾人を驅て自ら欺かしむること甚だ大なりとは雖も、而も尙吾人は彼の我等と同じき暗弱なる人々の半は無知より來れる、而して多分僅か半面のみ誠實なるが如き稱讚の徹頭徹尾價なく取るに足らぬ者なる事をば、幾分か之を知らざるに非ず、是れ斯の如き稱讚は、他の時と場合とに於て彼等が是は神の嘉納したまふ所なりと嘖々稱讚する事件どもの何たるかを考へ見るならば、實に吾人を惑はすことの大なる者なれば也。故に我等の特に警戒すべきは此に在り。我等は益々神と密かに交はり、直ちに親しまざるべからず。我等は屢々、——せめては思想と志望とに於て、——業務より、快樂より、否な外部の禮拜よりさへも、退ぞきて、神の現前まします無形の聖堂に入らざるべからず。彼の聖堂裏に於ては誘惑者の狡猾手段とことごとく我等の眼前に暴露して見ゆ。我等は此世および之が君たる魔王の報賞賚賜の如何に空々にして風を捕ふるが如

第二講 話

き者なるかを見る、是に於てか彼が魔力は衰ふ、彼が一見美なる如き妖顔は、夫の目を以て之を照せば、臭氣鼻を撲つの墓と化し去る。只今まで愛すべく見えし者悉く忌はしき蛆の巢窟とは成れり、只今まで媚を獻ぐる濃かなる語と聞えし者忽ちに變じて地獄の厭ふべき呪詛とは成れり。

神は我等を能く此大危険中よりすらも拯ひたまふ。神を頼み、神のために警備する人々をば神これを助けて此危険の淵に陥らざらしめたまふ。請ふ明日諸君は其嚴肅なる誓言を神の御耳に聞えあげよ、而して己が薄弱なるとは飽までも感じながらも尙敢て明言せよ、我は我が兄弟の靈魂を救はんため、而して又我が神の榮光を進めんため、此の聖職を擔ふべく、聖靈に感動せられたりと。

第三講 話

聖書の足備

第三講話 聖書の足備

基督に於ける兄弟諸君——余は前回の講話に於て我が派立式文中の第一問を稍詳かに講じ、聖職に眞に召さるゝといふ事の何たるを考ふるよりして自然に一步を轉じて聖職の一般の性質を論じ、延て基督の各忠僕(忠信なる教職員)に無んばあるべからざる第一にして且緊要なる資格を論じたり。故に今日は諸君既に此等の大原則を熟知せらるゝ者と見做し、進んで是よりは次々の問に論及し、如何にせば諸君其是等の問に答ふるの詞を以て立てん、誓約を最も善く實踐履行し得べきかを神の幫助に由て考がへんと欲す。

按ずるに聖品會吏派立式文中に出たる次項の二問は茲に至緊至要の二件を呈出し來る、——即ち其の第一の問には曰ふ、汝舊約新約の聖書を悉く偽なく信ずるや、第二の問には曰ふ、汝の職分を盡すため汝に定めらるゝ所の禮拜堂に集まる衆人に勵みて聖書を讀きかさんとす

聖書の足備

五十五

「汝聖書はイエス、キリストを信ずる事によりて永遠き救を得るに必要なる凡の教義を載すと堅く信ずるか——又は其の聖書に示されたる事によりて汝に托けられし民を教訓へ又其聖書によりて論決られ證明せられ得べしと堅く信ずる事の外は永遠き救に必要なりとして何事をも教へずと決心しや」

(聖品プレスプロテロ派立式文)

「や。されば是等の問は、諸君が教師たるの職を委託せられたる以上、其群
 信徒を教誨する所以の規矩と品質とに直接に關係する者なるや言を
 俟たず。但し此事たるや會長プレジデントの職を志願する人々に與ふる同列の問を
 顧りみるときは更に幾層の明瞭を加ふるあらん。會長プレジデントは其地位一層高
 き者なるに因て、基督教の大道及び眞理を人々に教ふるの權力を附與
 せられ、職掌を委任せらるゝこと特に深高なる者とす。是を以て彼等に
 與ふる問は遙かに判然明晰なる者にして、其義幾層仔細綿密なるを見
 る、曰く、――

「汝聖書はイエス、キリストを信ずる事によりて永遠カワイき救を得るに必
 要なる凡ての教義を載すると堅く信ずるか、―― 又は其聖書に示さ
 れたる事によりて汝に托オウカられし民を教へ又其聖書によりて論決カクら
 れ證明アカシせられ得べしと堅く信ずる事の外は永遠カワイき救に必要なりと
 して何事をも教へずと決心カクしや」
 此問の旨趣は甚だ明白なる耳。是れ將來の教師（會長の志願者）にむかひ

て其將に説かんとする所は徹頭徹尾聖經中なる神意の唯一十全なる
 啓示（天啓）に基づくべしとの、公然たる言質コトワケを要むる也。舊教をも新説を
 も同様に禁ずる也。全教會にも一箇人にも凡て天啓の教義外―― 神の
 聖靈が始めて之を人心に注入し、聖書の記者が神來の筆を以て後世に
 傳へたる教義以上および以外―― 其説を擴充することを許さざる
 也。然のみならず此問たるや又聖書の言意につきて爭論の起りたる時
 に之を解釋すべき當然の方法を我等に指示する者と謂ふべし。我が殉
 教家ヒルポット（Philpot）が其迫害者輩に答へし如く、聖書は初代の教會
 にて教へたる所に循ひて信受せずんばあるべからず。若尙之につきて
 も議論紛々たるあらば、聖書を以て聖書を解釋するを要す、多岐にわた
 らんとする辭句は須く他處に於ける類例を以て解説すべし。箇人にも
 あれ教會にもあれ、聖書の一箇處を他の箇處と撞着するが如くに解く
 は、不法として禁ぜらるゝ。聖書に載たる一章を他の一章に戻きて説くべ
 からず。大綱第二十條、此の如く此問は則ち聖書が吾人の信仰の規矩準

第三講 話

細として其權威の絶大なる者たることを斷乎と明言する者なれば、箇々の良心は聖書を以て最終至高の控訴處とせずんばあるべからず。人或は之に異議をとなへて言はん、果して斯の如くんば、各箇人肆に聖書を曲解して遂に客觀的なる信仰の根據を盡とく掃蕩しをはらんと。此の異論に答ふるは易々のみ。凡そ己れにとりて基督教會の教と稱すべき者に服せずして此の終審庭に最後の控訴或は上告をなす者は極めて怖るべき危険を冒して之を爲すなり。此の如き人は己に對しては一見聖書の特許解釋者としも稱すべき者に反對して自己の判斷を主張する者とす。抑も、教會は信仰の道についての爭論を治むる權あり、大綱第二十條、されば若し其人我意をつよより或は自己の臆見を愛するよりして此の擧に出るならば、不信の流沙上に投ぜられんずる危険きはめて大なりと謂はざるを得ず。而して此の危険は彼が不服を唱ふる權威——彼が被告とする教會の教説——の重大なるに隨ひて愈々増加す。彼が自己の臆見に本づきて不服を訴へたる件にして若し一統

第三講 話

に信受せられたる彼の二三信經の如く初より全教會にて承認し來れる聖經解釋ならんには、嗟彼如何にしてか其の教會に聽くことを拒むとの罪、其兄弟たる信徒に於けること異教徒または關稅吏(パブリカン)の如しとの愆を以て排撃せらるゝを免かれ得んや。然し乍ら斯る怖るべき危険を負ひつゝも、各箇の人は、萬一訴ふる所あらんと欲せば、聖書所載の神語を無上の權威、最高の法庭として之に訴へざるべからず、而して又教會は何にまれ拯救を得るの要件として神語外の事を人に強ふべからず。

諸君が誓約する所の者は是の如し。幼童に問答を授くるにも、病を慰問するにも、無知の者を親ら訓ふるにも、バプテスマの志願者を訓練するにも、教會信徒の前に説教するにも、諸君は之を以て其言教の規矩準繩どなさざる可らず。

次に我等は此要件を遂ぐる者たる彼の説教の性質の如何を考へ見て、此の原則を實際に適用せんとす。説教は諸君が教職中の此部分の絶頂

第三講 話

極點なる故に、我は簡短を主として茲に此の説教の何物たるを講究すべし、即ち聖書の中にて我等に與へられたる神意の啓示を講説するは是れ果して如何なる事ぞや、一言を以て之を蔽へば、耶蘇基督の福音を宣傳するは是れ果して如何なる事ぞや。

按ずるに、我等が動もすれば陥らんとする過謬は重に聖書中なる天啓教理の全豹を通視せずして、偏へに或は主ばら該真理の一方面に重きを置きつゝ、他の多方面を輕々に看過するより起る者とす、而して此困難は彼の在昔異教徒中より直ちに入教せし人々の爲に設けたる、當時きはめて明確なりし規則を今日已に境遇の一變せる世襲教會に適用するの事に由て主ら我等を苦しむる者なり、是故に諸君姑らく己れが今日の特別なる境遇を忘れ、而して福音を全然たる異教人——未だ嘗て之を聞かざりし人々にして、之が取舍信否を自ら決すべかりし者——に宣傳ふといふ事は果して如何なる者なりしぞやと潜心に吟味するならば、想ふに、我等は容易に真正の見解に達するを得べし。

第三講 話

斯の如き説教師の針路は必ず左の如くなりしや明らかし、——即ち彼が宣説するを要せし者は最も當然に是れ神學と稱すべき者なりき、彼が業務は墮落したる人性の無契約なる晦暗中に彷徨する人々に眞神の事を教へ、又彼等が其眞神に對するの關係を教ふるに在りとす、聖保羅がアテナスに於て第一に宣説せし如く、斯る説教師は先づ彼等異教人にむかひて其創造者其保存者たる獨一主宰の眞神を説かざるべからず、此神が其一切の受造物を深く愛し給ふ事を其聖徳の骨髓として直に説示せざる可らず、此愛徳は、其れ自身の必然なる法則に依て、亦是れ自己の完全なる性質に反する事を故らに行ひて世間の秩序及び一和を破る者を盡く責罰するの原則なりといふ事を説明せざる可らず、(是れ斯の如くに自己の性質に反するは即ち神の性質に反する者なれば也)已に説きて此に至れば、又神の自啓に就て學び得たる光を以て、其人は必ず罪とは果して如何なる者なるかを明示するならん、偕是の如く説教師は其聽聞人の真心に訴たふるあらん、是に於てか彼の心裏の

第三講 話

聲——其調子は沈滞して語脈は不明なれども、尙其人の性質と深さを同じうする力を以て各箇の墮落せる心を竊に振蕩する者——は發して説教師の訓誨に應へ、聽聞者の靈魂に説教師の言辭を反響せん。斯の如く其神學——眞神の衆徳を言語に發表せる者——は、其第一の發端に於てすらも、同時にまた是れ最も眞箇に人類の歴史たる者と謂ふべし。説教師は其聽聞人をして誠に我は神に遠ざかり且神に敵したりと自然に心に感ぜしめ、嗟我は未來永遠に不幸の淵に沈淪し了りぬと必然に歎かしめ得たる時には、宜く更に一步を進めて之に説くべし。神の至大なる愛は斯の如き罪人までも均しく霑ほして漏らす無しと。但し上帝の叛逆人をして救はるゝとを得せしめん爲に彼の愛は先づ如何なる大大事業を成したりしぞや。此救罪法たるや刑罰すること無しに救すが如き、感化すること無しに救ふが如き、單に氣隨擅斷なる姑息の仁に非ず、罪惡に墮落したる人類は其刑罰を受ざるべからず、否な其刑罰は甚だ大にして人類を殄滅せずんば已まざらんとす。説教師説きて此

第三講 話

點に達せば、之を機として全能者の絶大なる愛を語るべし、即ち眞神が贖罪の靈羔を賜ひし事——無始無終なる神子が降りて肉體をとり給ひし事——人として、眞箇の人として人中に立ち給ひし事——罪人の刑罰を身に負ひて其死を遂げ給ひし事、是皆此に説き出づべき好題目とす。但し説教師は此に止まらじ、必らず百丈の竿頭更に一步を轉じて説示せん。斯の如くにして死し給ひし者は復活したまへり、人として復活したまへり、人として今や新らしき國——正義と平和と恩恵とを以て本色とする國に首長たり、此國に於ては凡そ其首長たる主と合體して同生せんと要むる者は正義なる神に十分嘉納せらるべし、如何となれば斯の如き人はもはや自己に在りて立てる者にあらず、其首長たる唯一の義人に在て立てるが故なりとす。然のみならず説教師は此國が恩恵の國なることを聽聞人に説くべく、而して三一の妙理に論及しつゝ、聖靈も亦神と御子とに同質同等にして均しく無始無終なりと説くべし、抑も聖靈は永へに多福神妙なる活身位(ペルソン)にして單に神力

第三講 話

又は權能たる無生物に非ず、基督のために人間に現前し、各人の心に宿り、萬人を一に結織したまふ、各人のために別々の事業を成し給ふ、其事業たるや先づ人々を御父と御子とに引くに在り、人々の寤めたる愛情を涵養し、人々の枉れる意志を醫愈し、日に月に愈盛んなる不思議の感化を施こし、終に下界の土塊をして天上の星のごとくに耀かしめ、震怒の子をして神の子とならしむるに至る。説教師説きて此に來らば、今は基督の御體の大奧義大秘密——即ち聖靈なる神の宿りたまふべき幕屋たる教會を聽聞人に開陳し、而して教ふべし、聖靈は禮典サクラメントに由て働きたまふ、基督は徴跡に由て祝したまふ、父神は機械に由て救ひたまふと、斯の如くなるが故に畢竟尙是れ神學テオロギなるや明らけし、是れ眞神に關して、説教師が宣傳すべき言コトバなるや著し、説教師が人心を感化して拯救に導びかんと望み得るは一に神の至愛アガペにこそは由る者なれ。是すなはち、其思想の單純なる者として、基督の福音を門外漢——未だ嘗て福音を聞かざりし人々——に宣傳すといふ者なるべし。

第三講 話

此を稽へなば、今日に於て我等が福音を宣傳すといふは如何なる事なるべきかを知るに難からず、惟みれば眞箇に變じたる者は只左の一事のみ——即ち今や古人の如く謂ゆる聖靈の先驅的感化力インスピレーション、聽聞人の心を傾動して拯救の福音を信受せしむるならんとの望を以て新嘉音を丁年者に齎らすに非ず、我等は彼の神の特恩に由て既に幾分か此の「先驅的恩恵」に感化せられたる人々に福音を傳ふるなり、其相異なるは一に此に在りとす、其他の諸點に於ては、今日の我等が爲すべき事と初代の福音宣傳者が爲したる事とは依然として同一なる耳、我等もまた均しく、神の御力カハレに由て、各箇の生靈の意志と感情とを鼓舞しつゝ、之をして眞神を愛せしめ眞神に事へしめんことを務めざる可らず、我等も亦彼等と均しく聖靈なる神の力と助とを待みて各箇人の靈魂を我意と世欲と肉慾の鐵腕下より救ひ出し、之をして其創造主と其救贖主と其聖成者を愛し且之に事へしめんことを務めざる可らず、斯の如く我等も亦彼等が宣傳せし如くに、最も適當に最も眞實に神學——神に關

第三講 話

又は權能たる無生物に非ず、基督のために人間に現前し、各人の心に宿り、萬人を一に結縛したまふ、各人のために別々の事業を成し給ふ、其事業たるや先づ人々を御父と御子とに引くに在り、人々の寤めたる愛情を涵養し、人々の枉れる意志を醫愈し、日に月に愈盛んなる不思議の感化を施こし、終に下界の土塊をして天上の星のごとくに耀かしめ、震怒の子をして神の子とならしむるに至る。説教師説きて此に來らば、今は基督の御體の大奧義大秘密——即ち聖靈なる神の宿りたまふべき幕屋たる教會を聽聞人に開陳し、而して教ふべし、聖靈は禮典サクラメントに由て働きたまふ、基督は徴跡に由て祝したまふ、父神は機械に由て救ひたまふと。斯の如くなるが故に畢竟尙是れ神學なるや明らけし、是れ眞神に關して、説教師が宣傳すべき言ことばなるや著し、説教師が人心を感化して拯救に導びかんと望み得るは一に神の至愛愛にこそは由る者なれ。是すなはち、其思想の單純なる者として、基督の福音を門外漢——未だ嘗て福音を聞かざりし人々——に宣傳すといふ者なるべし。

第三講 話

此を稽へなば、今日に於て我等が福音を宣傳すといふは如何なる事なるべきかを知るに難からず、惟みれば眞箇に變じたる者は只左の一事のみ——即ち今や古人の如く謂ゆる聖靈の先驅的感化力イニシヤティブ聽聞人の心を傾動して拯救の福音を信受せしむるならんとの望を以て新嘉音を丁年者に齎らすに非ず、我等は彼の神の特恩に由て既に幾分か此の「先驅的恩惠」に感化せられたる人々に福音を傳ふるなり、其相異なるは一に此に在りとす、其他の諸點に於ては、今日の我等が爲すべき事と初代の福音宣傳者が爲したる事とは依然として同一なる耳、我等もまた均しく神の御力御力に由て、各箇の生靈の意志と感情とを鼓舞しつゝ之をして眞神を愛せしめ眞神に事へしめんことを務めざる可らず、我等も亦彼等と均しく聖靈なる神の力と助とを待みて各箇人の靈魂を我意と世欲と肉慾の鐵腕下より救ひ出し、之をして其創造主と其救贖主と其聖成者を愛し且之に事へしめんことを務めざる可らず、斯の如く我等も亦彼等が宣傳せし如くに、最も適當に最も眞實に神學——神に關

第三講 話

はり、神の愛に關はり、又該の圓滿なる愛の炎々たる聖潔に關はる言^{ことば}—
 |を宣傳せざる可らず。罪人もし其罪を脱せんと欲せば、愛は之をして
 罪を離れしめん、若し其罪を脱せんと欲せずんば、愛は之をして多福者
 の交より離れしめん。愛は天國の嚴麗輝煌たる牆壁を築きつゝある所
 の手を以て直ちに亦地獄の火焰を煽がんす。—此眞理を我等は聽
 聞人の眼前に描き出さるべからず。
 然のみならず、我等はまた此神學をして人類史たらしむるを要す、即ち
 我等は聽聞人にむかひて人類の罪は果して何物なるかを説き示さ
 ざるべからず、人々の性質上に神の聖顔の光を注ぎて其性質の疑難を
 解釋せざるべからず。而して斯く無始無終の御父と御子と聖靈を人々
 に説示するに當りて、亦彼等に彼等自身を説示するを要し、又彼等が棲
 息する神恩國の一切の奧秘を盡く明示するを要す。
 我等須く人々に説明して曰ふべし——人類の各能力は今も尙眞神の
 手跡を帶ぶとは雖も、人類の滿身に罪惡の現前するに因て其各能力は

第三講 話

腐敗したり、—人々は其原造者たる神の御手にて是非とも全然改造
 せられずんばあるべからずと。斯の如く福音の各教説、および恩救の各
 訓誡は、我等が説教中の珍材となるべし。我等は須らく毅然として宣説
 すべし、更生^{うまれかへり}は神の行爲なり、全く神の聖慮に依る者なり、神が基督を經
 て賜ふ所の者なり、此の賜物^{たまひもの}を神は——其自ら規定したまへる方法を
 忠實に用ひつゝ——其凡て己れの教會に接駁^{つぎ}せらるべく選びたまひ
 し人々に欣んで速かに與へたまふ、即ち是の如き人々自身ならびに其
 子女輩に——否な凡て故意の剛愎と不信とを以て神の恩救事業を杜
 絶せざる人々には悉く欣んで之れを與へたまはんとす。又言ふべし
 此の第一の賜物の中には彼等が基督の爲に嘉納せらるゝの事、其生れ
 つける罪の責罰を免かれつゝ、第二のアダムと新たに合體するが爲に
 必ず神恩の感化力を受くべき者となるの事を合善す、此事は本來罪に
 生れたる人々に取りては極めて眞實に是れ新生^{うまれかへり}と稱すべき者な
 りとす、是れ全然望なきの暗室中より出で、生命に入る者、拯救の新途

第三講 話

上に在て間斷なく發達成長すべき機會に入る者とする。彼等の周圍には必需なる準備の在るあり、彼等の心内には活動する力の在るありて、此等の準備及び活動力は、其の働の阻碍せらるゝ無くんば、必らず彼等を圓滿の域に導き、榮光の境に誘はん。一言を以て之を蔽へば、是れ其無限の福德と其無限の危険とを擔ひて恩惠の國に始めて入れる者たる也。但し是と同時に我等はまた神にむかひて心意を眞に豹變するの必要を勇猛に説かざるべからず、心意の此の感化は神が其權能を以て各箇別々の靈魂中に引起したまふ者なりとす。此箇別責任の大眞理は是れ更生の教義、更生教義の正しく理會せられたる者より必然に出で來る者なり、決して是と衝突する者に非ず。其更生するに當りて人々は箇々別々に聖靈の直接なる感化力を身に蒙る者なるが故に、或は聖靈を拒みて滅亡に就くか、或は聖靈を容れて拯救に達るか、其一に出ざるを得ず。此事を説示すると同時に我等はまた彼の頑硬剛愎にして感化せらるゝを肯んぜざるが如き舊人を宇宙第一の叛逆人として之が悚然寒

第三講 話

心すべき光景を聽聞人の眼前に描き出さるべからず。想ふに我等は亦左の如くして感化の何事たるかを人々の心裏に明瞭ならしむるを得べけん。——感化とは神が靈魂内に引起したまふ化工を謂ふ、此化工たるや神の無上主宰なる聖靈の不測不見の妙工にして、之れを以て神は、風氣の海上に於けるが如く、冥々裏に其生靈の箇別眞實本身的なる意志を己神自身に招き拯救に導き給ふ、此生靈の意志たるや神の全能力を以てすれば固より之を壓壞すること易々たれども、其が意志として在る間は、強て外部の勢力を以て變化するを得ざる也。是すなはち眞箇の感化と稱すべき者にして、必ずしも急劇なる者に非ず、否な或る場合に於ては却て其行歩甚だ遅々たる者にして、其日々の増益殆ど見るべからずと雖も、之を興かり享くる人々に於ては是れ最も眞實なる者とす。斯の如く其感化せんとする人々を潔淨して之が意志を神に歸服せしむるは是れ萬能なる聖靈の功なり、而して斯く更生せる人々は其意志の全然聖靈に服従したるを心に歡喜して措く無し、人其心裏に働

第三講 話

きつゝある神の恩恵に由て中保たる基督を信じ、又此世界を措きて神を己が分と選ぶは、是れ暗より明に移るの大大變化と謂はざるべからず。是すなはち眞箇の活信仰なる者にして、——是より生ずべき諸餘の善事は盡く措て問はざるも、——信者は單に是のみを以て神の前に義とせらるゝを得る者——即ち義と稱せらるゝを得る者——とす。諸更^〇生^〇と感^〇化^〇と稱^〇義^〇とにつきて見解明らかなる以上は、また靈生活の自餘の各程度につきても亦同じく明らかなるを得べし、即ち我等は明らかに見るべし、更新てふ者は唯に墮落したる聖徒の挽回を謂ふのみに非ず、亦聖靈なる神が薰陶練磨の中にある靈魂内に引起し給ふ日新の潔成行を謂ふ者にして、實に是れ聖靈の指導下に在て彼の「見よ、我萬物を新たにせん」といふ御約束——即我等が固有なる罪惡と戦ふて呻吟する靈魂にとりては其一切の相續物中最も賸かなる胎傳物とも稱すべき者——の應驗なりとす。斯の如く我等の周圍なる教會制系の衆部分は悉く十分に明瞭となるべし。皆是れ幽隱なる神徳の現前を蔽へる顯

第三講 話

然たる幔幕なりとこそは知らるゝなれ。衆禮典、祈禱、聖徒の親交、聖職の品級等、皆キリストを談ず、自身を談ずるに非ず、皆御父を證す、皆聖靈の働に機械となる。——全地は只是れ天國の玄關たるべく、青空の雲彩は神の榮光赫灼たる金殿丹墀の床たるべく、我等は既に基督の國に在りと感知すべし。斯の如く我等は墮落者を挽回し且聖徒のために徳を建つる我等が職分の何物たるかを理會すべし。即ち我等は曉らん我等が「^〇のバプテスマ」てふ者は、或人々の夢想せしと見ゆる如く只一擧の大救を表證する者に非ず、實は是れ我等が凡て悔改して基督を信ずる人々に十分の赦罪を保證せられたるの境に入るを表證する者とす。此境に入る者は幾分の赦罪を保證せらるゝに非ず、全然たる赦罪を保證せらる。且又此バプテスマたるや吾人を基督に携ふる者なるが故に、凡そ其罪に由て陥りたる墳墓骨穴中より悔悟の熱涙を以て基督を仰ぎ望む人々のために至完全至全なる赦罪を來す也。我等はまた曉らん恩恵の賜物には厚薄大小の差等多し、我等は其至大至高なる者を自ら獲んと

第三講 話

務めざるべからず、又人を導いて其至大至高なる者を翼はしめざるべからずと。我等は見ん聖靈其感化の工を進むるに循がひて人々は其更生を照覆せし先驅的化動の程度より歩を轉じて其感化を完たうするの神恩に達し、更に進んで其更新の域に至る、而して此更新たるや、神の其工を完成したまふに隨ひて、更にまた堅固なる愛慕の高程度に經涉す。一たび此域に達すれば、即ち茲に終まで、忍ぶの福、白衣、棕櫚の葉、涙を拭はれたる目、羔羊の飼養、生命の冠冕ありて之を待つあり、終には、善かつ忠なる僕ぞとの賞詞にあづかるあり、然る後に活る水の源に飲むことを得せしめらるゝあり、最後には無窮の寶位、長久の玉座の段階に坐することを許さるゝあるに至る。

兄弟諸君、請ふ此に姑く歩を留めて今我等が既に究め臻りたる論點を考一考せよ。以上我が説き來れる所は悉く我が諸君の前に開陳したる第一の命題中に總説せらる、——即ち諸君が説教する所は徹頭徹尾是れ神學なるを要す、所謂神學とは神の御事を人々に宣傳する者にして、

第三講 話

徹頭徹尾是れ使徒信經たるを要す、即ち是れ御神と御子と聖靈とを明々白々に宣言する者とす。

諸此事を例解せん爲に我は今二三の語を以て之を彼の吾人の中に普通なる説教上の或る謬見に對比して論せん。——第一には是れ哲學と稱する者の反對たる也。我が所謂神學は神の身品を論ず、固より此事は傍ら神學をして亦偶然に至真なる哲學とならしむ、然れども是只偶然なる而已。哲學の目的とする所は神學にとりて偶然の事とす。神學は思辨工夫に係る問題、疑團及び困難を解答するを以て目的とする者に非ず、之を氷釋すとは雖も、神學は御父と御子と聖靈の身品を啓示する者にして、直ちに最高の理性に訴たふ、——單に論理的なる智力を運用して理會するに非ず、信仰を以てして理會する所に訴たふ、——意志に其最も深奥なる室に就て訴たふ、——諸感情に其最も遼遠なる深に就て訴ふ。

且又神學は哲學に非るが故に、亦是れ同じく本來は道德學にも非ず、固

第三講 話

より偶然には是れ唯一無二の眞實有功なる道德學なりと雖ども其然るは只是れ偶然のみ、單獨の道德學、即ち外部より、一切の道義物の眞本源たる者より、何の知見をも何の認許または制裁をも受ざる道德説は、墮落失墜せる人類の中に在ては、精神上及び靈魂上の解剖と殆んど其類を同じうす、——只是れ嘔吐を催はすべき病患と死との汚穢を臆臆と覗く者のみ、生命の己に飛び去りし空殻を徒らに盲然と手摸する者のみ、基督教は、人の子と自ら稱へたまひし者の大力なる御言を斯る人に齎らす者なり、而して其全能を力として彼の死屍に命ず、少者よ我なんぢに言ふ興よと。

我等もし其聖職をして有功ならしめんと欲せば、神學と其各種の代用物(哲學等)との間に存する此の差別を始終心に留めずんばあるべからず、如何となれば是よりして左の如き實際的なる結果の生じ來るあるを以てなり。

第一、我等は其説教の全體を以て神を人衆の眼前に描き出さんとを

第三講 話

務めざるべからず、神を基督に於て顯示せざるべからず、神を聖靈に由て顯示せざるべからず、想ふに此警戒は今日ほど必要なりしこと未だ嘗て有らざるが如し、輒近宗教上の感覺の最も鋭敏なる人々を尤も深く悦ばしむる宗教上の教誨(説教等)は、太く主觀的なる者なり、是其有力なるよりして然る者なりとは雖も、實に危険の甚だしき者と謂はざるを得ず、是の如きは是れ徹頭徹尾道德上の解剖なる而已、固より説教の如き者は到底心情の委曲を説き盡す能はず、靈惑の萬狀を描き盡す能はず、斯の如き教誨(宣教)は實効ある者と感ぜられたり、因て其勢力熾んたり、是もとより餘りに精査仔細なることは得せず、餘りに穿鑿綿密なることは得せず、然れども餘りに此事に専らなるなしと謂ふべからず、是あるひは始終此の病體解剖の室内に彷徨せん、是あるひは人類を以て始まり人類を以て終らん、而して眞神には唯一般の大權能として汎然論及するあらん而已、永久萬福なる三身一體の神を以て人類の衷心を照しつゝ、神を以て始まり神を以て終るべきに、然はなくして表裏に

第三講 話

斯く人を以て始まり人を以て終らんも知るべからず。

第二、右の觀念を實行せんために、我等の教誨(宣教)は神の自啓(神が自己の性質を啓牘し給ひたる教道)を眞實に了會したるより出る者ならざるべからず。我等もし單に教理のみを學びて神の何物たるかを知らざるときは、其宣説する所錯亂し撞着し或は偏倚せんとす。我等は神の啓牘黙示に係る教理の衆部分が如何に相互に符合和諧するかを知らず、是に於てか其教理の或者を放棄せん。——即ち我等は其宗教中より更生を省き去らん、是れ更生が感化と混ぜんことを恐れて也。——或は感化を省き去らん、是れ更生を打消さんことを恐れて也。——或は救罪を省き去らん、是れ人々をして罪を輕んぜしめんとを恐れて也。——或は忍耐を省き去らん、是れ人々をして自ら擅ならしめんとを恐れて也。——或は永棄説(レプロベーション、永滅説)を省き去らん、是れ人々をして絶望落膽せしめんことを恐れて也。——或は白施の恩惠説を省き去らん、是れ人々をして不道徳に流れしめんことを恐れて也。——或は戒

第三講 話

慎、恐懼克己、自制及び順従の必要を省き去らん、是れ人々が律法を以て自ら義とするに至らんことを恐れてなり。只神の御性質を明かにする事に由て我等は神の黙示の、一和(聖經)の教義の彼此融會して相悖らざる事を認め得んのみ。我は二種の理由を以て此事を特に剴切に諸君の心裏に印刻せんとす。——第一、神は手段方法を以て人類を教化し、而して常に勤勉を賞したまふ者なるに因て、我等は推斷す凡そ人々が深き苦心と勉學と冥想と祈禱とを以て準備せざりし聖職役は必ず自身と他人とに最も危険なる者なりと。然れば誰か敢て些少の準備を以て此聖職に従事することを得せん。世間の重要な職務と雖も人々は我々汲々たる勉學勤勞を積まずしては敢て擔任せず。茲に無知無識の野巫醫ありて、其習はざる手及び其學ばざる心を以て患者の生命を犠牲にしたらんには、必ず其醫社會において之を故殺と同一視せん。靈魂は形體よりも貴し、されば其診察する病の何たるを知らず、其之を療治すべき藥の何たるを辨まへずして妄りにキリストの聖職に飛び入るは、是

第三講 話

れ其兄弟の最も貴重なる生命を戕賊する者に非ずして何ぞや。然れども派立式の執行せらるゝ毎に大抵斯る未熟漢の出で來らざるは無しと我は大いに危ぶみ思ふ。斯の如き人々は聖經の奥旨を深く究むることをせず、單に試験に應答するの準備をなせる而已。但し此弊惡は高等なる標準の一層普く採用せらるゝに至り、且神學上の教育の一層其度を深うするに至らば、必ず減ずるならん。既に明言せし如く我は確信す、今にして其學と準備とを大いに擴張するに非れば、聖職は依然として吾人の中に侏儒たらん而已、畸形たらん而已。

此道理に由て我は先づ切に諸君に勸む、諸君もし神の使命を他人に傳ふる者となりて其職を辱しめざらんと欲せば、己れ自ら神の性質を審かにせずんばあるべからず。想ふに諸君はまた此に其聖職に對する準備の何事たるべきかを見るを得んのみならず、又其聖職を日々に行なひ續くることの何事たるべきかを見るを得ん。

諸君が此聖職に入るに必要とせし所の者は亦諸君が生涯これに従事

第三講 話

し行く間恒に諸君の精神を鼓舞せずんばあるべからず。諸君もし神を人に教へんと欲せば自ら神を知らざるべからず。諸君もし神の忠信なる見證者たらんと欲せば、其日常の生活をして如何ならしむべきかは、此の事また之を諸君に教へん。

諸君若し神を明言する事を得るやうに神を知らんと欲せば、神に近づきをらざるべからず、而して神に近づきをる事は只神を愛する事によりて能くすべし。愛は盲たる目をさへに開きて神を見しむる者にして、一に是れ神の賜物なりとす。神が過ぎたまふ時に諸君を岩間に匿す者は愛なり、故に曰ふ凡そ愛なる者は神に由て生れたる者にして、又神を識れり、神は即ち愛なれば也。然り、請ふ常に之を記憶して日夜忘るゝ勿れ、愛は神の賜物にして、神これを己れに事ふる一切の人に賜ふ、愛なければ萬事空し、愛は又其他すべて諸君が需むる物を其實藏より出して諸君に供給することを能くす。

神を愛するの事は諸君をして又神を自ら愛するに至らしむ、而して又

第三講 話

是れ諸君をして其兄弟を愛せしめ且其兄弟を善く知らしむ、如何となれば愛は最も眼光の鋭敏なる者なれば也。善く愛する人は其兄弟の需むる所を見知りて之を供給することを能くす、如何となれば愛は救療に敏ければ也、而して又愛は凡て他を救療する人々に缺くべからざる徳を具有する者にして、即ち能く苦難者を懐けて之を己れに引よせ、決して之を逐はらふが如きこと有る無し。愛の手は甚だ柔かき者にして、其觸るゝや綿のごとくなれば、最も深く傷つける人も之が撫摩を忍ぶことを得るなり。又愛には實丸ありて直ちに其正鵠に來り中る。此事は諸君の聖職及び特別にも諸君の説教をして力あらしむ。是の如き説教は乾枯、散漫、茫漠たる汎論に非ず、若くは徒らに文章を飾り又は徒らに辭句を疊ねて厭嫌を惹くが如き者にも非ずして、却つて聽聞人をして真に活る聲と感ぜしめ、神に關するの聲また彼等自身に關するの聲と感ぜしめ、——遠地より來れる嘉音と感ぜしめ、困頓せる心の要する使命と感ぜしむ。彼等の説教は人々の活ける言辭——即ち或は幾分か素

第三講 話

樸ならんも、其精神には基督を愛する情の充ち満てる言辭——が古來必ず有すと知られたる力と恵とを饒かに具へん、而して怠慢と罪惡の硬皮を貫きつゝ、神の力其物の如くに勢鋭くも聽衆の眠れる良心または老耄たる良心に必ず徹らん。

我は此點に特に重きを置きて論ず、是れ我が諸教會堂にてせらるゝ説教の多數には何人も満足に耳を傾くる能はざれば也。自家の説教を嚴密に吟味して大いに愛へ、深く愧つゝ、長太息を發せざる者も極めて寡い哉、噫、固より無數の教職をして盡く雄辯家たらしめんことは到底期すべからず、然し乍ら吾人が第一に要するものは雄辯にあらず、吾人が要する所は、古代の聖アンデレの如く己れ自ら基督を認め得て亦他人を基督に導かんと熱衷する人々の平易、剴切、眞實及び實際なる説教にこそあるなれ。吾等は人々が精到に眞面目に罪の何たるを説かんと欲す、拯救の何たるを説かんと欲す、天國地獄の何たるを説かんと欲す、然るに滔々たる普通の群説教は此

第三講 話

等の要求を満足せしむること嗟如何に少なきぞや。夥多の説教は只風俗を以て規定したる若干の時間を塞がねばならぬとの思想及び或る神學派内に行なはるゝ文句を填さねばならぬとの思想を以て編たる者のみ。是を以て其中には非常に長たらしき序言ありて、玄關が正室よりも大いなるの顛倒あるを見る。言はずとも明かなる言句を緩々と根氣よく反復する多きも驚くにたへたり。墮落につき又は救贖につきて汎漠たる言辭を弄しつゝ宛がら此等の凜然たる奧秘を活ける炎々たる事實に非ずして單に空虚なる言語文字なるが如くにす。或は一篇の説教にして神學の全體に汎く涉りつゝ、日曜ごとに斯の如く只題を易へ文字の配置を新たにして依然汎論に止まるあり。或は説教にして單に罪人を最も漠然と概論して何人にも適中せず、箇人を著るしく描き出すことは無くして單に抽象人の梗概を描寫しつゝ聽聞人を一々に反省せしむるに足らざるあり。是の如きはキリストを信じて、貴き者となせる人の剴切なる熱烈の直言には非ずして、冷腸、灰心の竊語なる而已。

第三講 話

兄弟諸君、斯の如き説教に對しては人々睡りつゝ醒ざらんども豈怪しむべけんや。感化せらるゝ者鮮く、徳を建るの事乏しくども、——罪人夥しく聖徒稀なるども、預言者預言すれども萬事依然舊の如くなるども、——何の聲音も無く、何の戦動も無く、骨と骨あひ聯なる無くども、以西結書三十七の七を見よ、豈訝かるに及ばんや。我は御愛子のために御父なる神に切に祈る。願はくは諸君をして一人も是の如き死したる非なる聖職に就かざらしめたまへ。願はくは神諸君の口を開き、與ふるに發言の力を以てし、諸君をしてキリストの永遠不朽なる福音の秘義を其言ふべきごとくに言はしめたまはんことを。

請ふ我をして此に重ねて諸君に忠告せしめよ、諸君——縱し他の資格は如何に饒なりども——もし先づ其心に神の恩恵を蒙むるに非れば、決して斯の如き重任の使節となるを得ず。諸君の胸中に先づ神を愛するの情熾んなるありてこそ、延て隣人を愛するの心を生ずる者なりけれ。此精神獨り能く諸君をして其の聖職任を當然に盡すことを得せし

第三講 話

む、——即ち之が爲に諸君の職任は嚴密周到なる者、否々驚くべき者にすらも成るべしと雖も、同時にまた是れ憂苦者にとりては最も眞實にして慈眼愛腸的なる同情の言と聞ゆべし。此愛は能く諸君をして、基督の十字架を負ふことを得せしむ、——諸君をして其毎説教中に必ず或る一箇の確定せる目的、其宣んと欲する或る大福音、其傳へんと欲する或る大恩約を立て、主眼となす事の大切なるを感ぜしむ。若し或る罪を責んと欲し、基督と其贖罪を明かにせんと欲し、其牧する信徒の或る必需を満たさんと欲して説教せば、斯の如き説教は決して馬耳東風視せらるゝの憂なし。

若し以上描き來れる諸君が職任の梗概を如何ほど疎雑にもあれ詳論せんとせば、尙説くべき者甚だ夥だし、然れども時間の之を許さざるを奈何せんや。主に在て我が愛する兄弟諸君、吾輩が諸君を爲めに斯の如き勞苦の生活に招致せんと欲する所以たる利害休戚の眞に重大なる者なることを我は重ねて諸君に一言せんとす。是れ諸君の兄弟たる人

第三講 話

衆を救はんが爲なり、是れ諸君自己を救はんが爲なり、是れ基督の榮光をなさんが爲なり。光陰は我等を待たずして過ゆく。我等のために尙遺れる機會は如何に寡きかは神獨り知りたまふ。我が聖成して此職に就かしめし人々の中に己に其大賞罰の審庭へ召されたる者多し、已に其勤勞を休める者または其偷安を奪はれし者若干名に及べり。兄弟諸君よ、此次には誰が召さるべきか。先づ誰か神の御力に由て神の爲に働かざる者ぞ、誰か己れの聖職に幾何の印證を取らざりし者ぞ、誰か主の來まさん時に然か働き居るを見られざらん者ぞ。願はくはキリストのために神これを今日我等に許したまへ。

第 四 講 話

教義
サクラメント及
誠規

「汝は主の命じたまひし如く又神の誠に循ひて此の公會の受たる如く基督の教とサクラメントと其誠規とを行なふに常に忠實を盡し又汝の教養と保管の下に在る民を教へて之を守らしむることを勉むるや」

(聖品ブレスプテロ派立式文)

第 四 講 話

第四講話 教義サクラメント及誠規

基督に於ける我が兄弟諸君——吾が例として此處にて今まで聖職志願者に日々の禮拜の終に告戒したる講話中に於て我は彼の會長の職に就かんとする人々に監督が問ふべく英國聖公會の派立式文中に定めたる諸問中の第一第二兩項を業に已に講究し了りぬ。其第一回の講話に於て我は彼の掛念なる疑問——果して我は神の聖靈より此聖職に召されたりとは如何にして知るべきかといふ問——に我は答へんと試みたり。其第二に於ては諸君が偏へに神の榮光のために此聖職に就かんとすと誓ひたる詞を更に又諸君と秤量したり。第三回の講話に於て我は諸君が神の默示に係る言を其宣教の唯一なる基礎となさんとすとの誓約を吟味し而して大慈悲の神が吾人に垂たまひし信仰の道と教訓との概則を妄用せざらしむべき若干の判明なる實際的準繩を諸君の参考に供せんと試みたり。今我は其次の問に諸君の注意を喚

第四講 話

んと欲す、而して諸君が該問に然諾をあたふるよりして其良心に誓約すべき職分の果して如何なる義なるべきかを幾分か此に明かにせんことを試みんとす。

今諸君に問ふ所の者は左の如し、――

「汝は主の命じたまひし如く又神の誠に循ひて此の公會の受たる如く基督の教とサクラメントと其誠規とを行なふに常に忠實を盡し又汝の教義と保管の下に在る民を教へて之を守らしむることを勉むるや。」

此に諸君は判然たる三種の職分を負へるなり、三箇別々なる任務を委ねられたる也、即ち一には教（ドクトリン）、二にはサクラメント、三には誠規（ディスシプリン）是なり。我等は此等の三點を各別々に觀察し、而して及ぶかぎり（甲）之に對する我等の職分（乙）之が遂行を妨ぐる困難（丙）及び其困難に打克つの最良法を講明せんと欲す。

第一諸君が「教」につきての誓約は諸君に向て何を要るや、先づ諸君の聖

第四講 話

職は徹頭徹尾教義上の眞理を維持せざるべからず、神は大いに其默示を我等に托して守護せしめたまふ、祭司の口には知識を持つを要す。幸ひにして吾人は聖書の在るありて信仰の一定規矩なきに非ず、又初代の信經および正統的の公禮拜式文を有す。但し古來の經驗に徴するに、是等の物は忠信なる活宣教を以て揮ふときは、神の御恩に由て、其力はめて大なる者なりと雖も、其宣教にして忠信ならざる時は、神の眞理を世間の人衆中に活潑飛動せしむるが如き自動的勢力を神より賦與せらるゝこと無し。神の語をば強解之を解き去り、詭辨これを幽玄にす、而して良心問題論者輩が提起する朦霧の下に在て眞理の全體を寸裂分斷し、既に劈き了るや之を密かに他へ移し去る。禮拜式文は或は削減せられ、或は廢止せらる、信經は或は忘却せられ、或は疎略にせられ、或は單に一種の敬神的感情とせらる、而して其感情たるや忽ちに冷却して遂に全く消亡す。然るに活る聖職員は神の聖語を劍として揮はざるべからず、我が禮拜式文中に載たる教理を唱へざるべからず、我が諸信

第四講 話

經中に特記せる委託を護らざるべからず。我が信仰の道の大奧義が悉く、全くして人々の良心に貫徹するは一に此等の手段にこそは由る者なれ。斯の如く眞理を護持し又宣傳する者たる我等に於て全然忠實ならんことは極めて肝要なる者とす。我等に於て信仰の道に一二歩を誤れば、世間の人々は爲に百歩二百歩を誤らんとす。神の聖語は我等を経て其影を群衆の清眼に投ずる者にして、衆目は單純なる線または色上に於る些少の斷缺若くは紊亂を其網膜に捉へ、而して更に之を幾十倍に増大す、豈懼れ慎まざして可ならんや。眞理をして其固有の均齊「大小長短等」を保たしめんことは我等が特別にも神より委託せられたる重任たる也。此委託は我等一同に——大學講師たると教會牧師たるとを論ぜず——均しく與へられたる者とす。固より此等二種の教職は其各自特別の武器を以て守護すべき城砦を幾分か異にす、然れども我等の目的はすべて同じ。神が賜ふに餘暇と書籍と鋭敏の才智と古人との熟交を以てしたまひし人々は、基督教會の信仰箇條を作り成せる彼

第三講 話

の群教義を證驗と辨明と議論と答辨とを以て護持すべき天職を有する者なるや明らけし。此等の眞理を教會牧師は公會問答と家庭教訓とを以て年少未熟の人々に注入せざるべからず、公けの説教と私しの勸誘とを以て其群信徒に注入せざるべからず。且又我等が其職分として護持すべき所の者は唯に直接の教義を信仰することの全たきを謂ふのみに非ず、眞理の圓滿なるを得るは一に其衆部分の恰當なる均齊及び比類(即ち比例)を保存するに是れ由る者とす。我等が神の眞理を偽に化することあらんとするは、皆に其中に虚妄を輸入するに由て然るべきのみならず、又其種々の部分に與ふるに本來之に屬せざるが如き偏重偏輕の不平均を以てするに由て然るべき者とす。然のみならず我等は、教(教説或教義)につきて此責任を有するのみならず、又公會の諸サクラメント及び職規につきても同様の責任を有す。サクラメント(Sacraments)につきても亦我等は——教理と實行とに於

第 四 講 話

いて兩ながら——唯に之を潔く執行すべきのみならず、亦人々を救ふの方案中に之を有力なる要件として安立せざるべからず。即ち我等は須く此事に由て深く自ら會得すべし、曰くサクラメントは凡て其究竟の本體に於ては是れ基督の命じたまひし如く毫も増減なしに執行せらるゝ者なり、曰く是れ人類の之を増加して吾人を煩はす者に非ず、又人類の懷疑に由て削減せられたる者に非ず、曰く是れ基督が許さんとしたまふ人々に施こす者にして、基督が許さざらんとしたまふ人々に拒む者なり、曰く我等は該禮典の精神にしたがひて之が執行の權を單に主の之を委任したまへる人々にのみ附與すと。

經驗に徴するに、是また吾人の大責任たるなり。第五世紀の基督教會は聖書を十分に有し、初代の禮拜式文および饒多の恩賜惠與を有したり、然れども其外なる此委托を忽諸にせし故に、紛々擾々たる夥多の謬見を叢生するに至りぬ、而して之が爲にサクラメントの肝要なる性質は夥多なる人偽(人間の發見)のために漸々に掩蔽せられ、終に我が公會の

第 四 講 話

大綱中に見えたる如く其性質までも戕なはれたり、外邦に於ける革新の諸教會に於ては此等の謬見を脱除したりしが、同時にまた使徒相傳の聖職を護持することを忘れたりしかば、爾來三百年間に於て彼等は屢々キリストのサクラメントの要義を失墜せり、而して其中には基督教徒の信奉すべき最第一の綱領をさへも公然と排棄したる者きはめて夥しかりき。

我等はまた基督の誠規を施こすを要す、而して是また決して輕き責任に非ず。固より此事につきては、今日の狀態と初代の狀態との間に莫大の相違ありとす。此相違は幾何の程度まで是れ既往の教會に於ける不忠信行の結果なりしか、幾何の程度まで是れ教會が其領分を擴めたる必然の結果、特別にも斯道が萬國民に認められたるの結果なりしか、今此には之を推し究むるを要せず。我等は事實を論ぜんとす、理論を考察するに非ず、我等は委托せられたる誠規を施行せんとこそすれ、委托せられざる者を求め搜すには非ず。我意ふに茲には膚淺なる眼光の達し

得るよりは深き物ありて存す。放逐或は絶交は教會の執權者が行用し得べき正當の武器なり。世間の抑損及び刑罰は唯是れ地上の出來事なるが、續々四方に發生して、屢々シボラ基督教會の誠規を陰翳したり。教會と親交するの特權教會員たるの身分を之が汚辱者に制限すること又は全く之を斯の如き人より褫奪することは、——是即ち教會の主が其教會に委任したまひし權威なり、是れ教會に委託せられたる論なりとす。英國に於ては事情一變して基督教すでに國教となりたるより生ぜざる許多の變則例外吾人に逼りて苦しむる無きに非ずと雖も、尙我は信ず依然として我等は彼の最も眞箇に基督教會の誠規たる所の者を大いに與かり享くることを得る者にして、隨て又之を大いに與かり享けざるべからざる義務ある者なりとす。

先づ、今や會長プレジデントは基督の體と血の聖サクレメントを醜聞汚行の人々に禁ずることを法憲上にて許されたり、但し其之を實行するには監督エピスコプに稟議して其の許可を得ざるべからず、此稟議の制は是れ教會が古來由

て以て各箇の牧師の權力を制限したる者なりければ也。——次に又之を超え之が上に、茲に一大權力の在るありて、忠信なる教師のために降魔の利劍と成るなり、此權力を我は、間接の戒飭ディレクト、ヂスシプリンチスシプリンとしも稱せん歟。牧師もし誠に聖潔にして言行一致し公平無私ならんには、サクレメントを施すことを如式に公然と拒まざるを得ざるが如き事は蓋し甚だ稀なるべし。善く治れる教會に於ては、凡そ誠規ディシプリン若し嚴ならば、如式の宣告を以て放逐絶交せられんとする人は、忠信なる良會員の斷案を密かに重んずるが爲に、早くも自ら退ぞきて親交を辭せんとす。此種の狀態は教會法憲の認めたる者にあらず、教會法憲カノン、ラウは却つて牧師に命じて云ふ、凡そ生前に正式の放逐宣告を受くることなくして死せし者**をば必ず之を葬むるべし**と。此矛盾は吾人の心を惱ますが如き場合を生じ來らざるに非ず。斯る場合をば法律を變改して——若し其醫せんと欲する者よりも大いなる弊害を來す無しに變改し得べくば法律を變改して——之を脱するを善しとするや固よ

得るよりは深き物ありて存す。放逐或は絶交は教會の執權者が行用し得べき正當の武器なり。世間の抑損及び刑罰は唯是れ地上の出來事なるが、續々四方に叢生して、屢々シカク基督教會の誠規を陰翳したり。教會と親交するの特權、教會員たるの身分を之が汚辱者に制限すること又は全く之を斯の如き人より褫奪することは、——是即ち教會の主が其教會に委任したまひし權威なり。是れ教會に委託せられたる論なりとす。英國に於ては事情一變して基督教すでに國教となりたるより生ぜざる許多の變則例外吾人に逼りて苦しむる無きに非ずと雖も、尙我は信ず。依然として我等は彼の最も眞箇に基督教會の誠規たる所の者を大いに與かり享くることを得る者にして、隨て又之を大いに與かり享けざるべからざる義務ある者なりとす。

先づ、今や會長は基督の體と血の聖サクラメントを醜聞汚行の人々に禁ずることを法憲上にて許されたり。但し其之を實行するには監督に稟議して其の許可を得ざるべからず。此稟議の制は是れ教會が古來由

教義サクラメント及誠規

て以て各箇の牧師の權力を制限したる者なりければ也。——次に又之を超え之が上に、茲に一大權力の在るありて、忠信なる教師のために降魔の利劍と成るなり。此權力を我は、間接の戒飭チレクト、ヂスシプリンチレクトとしも稱せん歟。牧師もし誠に聖潔にして言行一致し公平無私ならんには、サクラメントを施すことを如式に公然と拒まざるを得ざるが如き事は蓋し甚だ稀なるべし。善く治れる教會に於ては、凡そ誠規若し嚴ならば、如式の宣告を以て放逐絶交せられんとする人は、忠信なる員メンバ會員の斷案を密かに重んずるが爲に、早くも自ら退きて親交を辭せんとす。此種の狀態は教會法憲の認めたる者にあらず、教會法憲カノン、ラウは却つて牧師に命じて云ふ、凡そ生前に正式の放逐宣告を受くることなくして死せし者**をば必ず之を葬むるべし**と。此矛盾は吾人の心を惱ますが如き場合を生じ來らざるに非ず。斯る場合をば法律を變改して——若し其醫せんと欲する者よりも大いなる弊害を來す無しに變改し得べくば法律を變改して——之を脱するを善しとするや固よ

教義サクラメント及誠規

第 四 講 話

り疑を容れず。但し此に於てすらも其弊害は一見したる程に大なる者にあらずと思はる。如何となれば、此等の場合の大半に於ては、悔改^①是の如き場合に於ては、其到底あり得べからざる者に非る處にては、悲憫の情必ず吾人を驅て其の當人に悔改ありしと信せしめんとす。及び病中に於ける牧師職の回復は是れ罪人と教會との復和せる者と見做され得べければ也。

但し是等の變則を酌量しても、尙我等は其牧する教會内に高調の基督教的感情嚴正なる輿論を維持することを務めざるべからず、是れ斯の如き高調の感情は、一層公然たる戒飭或は懲罰と殆ど同じく、犯罪者をして我は其罪愆のために信徒の親交に入る能はず、聖禮典の特恩に浴するに堪へずと覺らしむる者なれば也。我等の委任は即ち大凡斯のごとし、而して此等の大委任たるや之を正しく果さんには許多の困難に衝あたるを免かれず。此等の各箇につきては内外より俱に障礙の來るありと雖も、忠信ならんと欲する者は之に面することを怖るべからず

第 四 講 話

次に請ふ少しく此等の委任を論ぜん。

第一、先づ教につきて言はんは、此に我等は眞先に内部よりの困難に出で遭ふ。單に懶くして安を偷む事、是れ大いにして且危き困難なりとす。眞理を首尾よく維持せんと欲する者は先づ自ら之を十分に學ばざるべからず。抑も眞理は一なり、宗教上の眞理においても學術上の眞理におけると毫も異なる無し。地に屬する學問の瑣末なる疎跡を精論せんと欲する人も必ず先づ其學の首要なる法則を辨へざるべからず、是の如く良心の事件として宗教上の件々を正確に談論せんと欲する人は必ず先づ其眞理の大體を心中に審かにしつ、其種々の細目に關する教誨をして之と符合せしむるを要す。然れども吾人の生來懶惰なるや此勞を嫌ふて退縮す。是に於てか我等は動もすれば己が宗教上の諸説を別々に拾ひ取り、而して之を彼此無關係に執持し、斯く精密を犠牲として勞を省き安を偷まんとす。

又懶惰は此外にも我等を妨礙す。我等は眞理に屢々接近すれども、之に

第 四 講 話

達せざるあり、即ち我等は確乎たる歸結を案出するに足るべき時日を惜み、勞を厭ひ、堅忍の思想に懶うし、是を以て我等が得る所は只是れ危険なる形の謬見——即ち半真理のみ、良心は預め我等に告て曰ふ、真理を容るゝは是れ容易の事に非ず、之が爲に我等は其耽樂する所の者を棄つるを要せん、其勞苦とする所の職分を躬から行なふを要せん、自ら甘んぜざる卑謙をなさざるを得ざらん、痼疾たる自義自得の念を抛たざるを得ざらん、步履を幾層嚴正にし或は祈禱を幾層剴切にするを要せん、大いに貪心を殺し或は罪のため深く自ら責むるを要せん、是に於てか我等は其真理を嫌ふて之を避く。斯の如く我等は其爲す所の何たるを知ること半に過ぐとは雖も、其生來の腐敗よりせる惰眠のため(我等は)之に向ひて目を閉づるを奈何せんや。

然のみならず、懶惰はまた我等を驅て剛愎に陥らしむ、即ち我等は説服せられんことを維れ恐る、己れが意見の可否を吟味するの勞に服するを好まず、我等は已に久しく其意見或は説を懐きをりて、今や之に僻す、

第 四 講 話

之を棄ることを大いに惜む、故に之が可否を問ふことを自然に憚かる。斯の如く我等は己が所信の臆見を辨證すべき道理の乏しきに隨ひて益々頑硬なる者にして、故らに目を塞ぎつゝ飽までも其所信の臆見に拘着す。

但し我等の内部に蟠まる仇敵は決して獨懶惰のみに止まらず、自然の性情よりして、我等は皆斯道の或る部分を偏愛し、或る他の部分を冷視す。此の傾向よりして我等は斯道の諸真理の權衡を(其諸真理を)信持しをる時に於てすら(動)すれば破壊せんとす。而して此危険は聖潔なる生活に缺くべからざる彼の警戒と注意とに少しにても缺くるある時には非常に増大し來る者とす。其故何如といふに、罪惡の行爲は自然に教義上の謬見を産する者なればなり。此等二種の弊惡間には最も親密の關係ありて存す。道德上の疾病が信仰を誤まる事は、形體上の疾病が精神を弱らするに毫も譲る無し。然のみならず、此等の誤は、神よりの冥罰として悪行者の身に日に月に増長す。神は彼等を放棄して

第四講 話

飽までも自ら欺むかしめ給ふ、否や彼等自身の心彼等をして頓墜せしむ。神の御靈これが爲に憂へて其人を去り、而して虚言をいふ靈、其人の心中に入る。

第二、内部よりする此等の危険に加ふるに吾人は亦外部よりする危険を以てせざるべからず。我等は其牧する人々を悦ばさん爲め、又は其歡心を得んと欲する人々に媚んために、真理の度を卑めんとするの誘惑に日日遭遇す。真理は其素面に於ては人衆に喜ばるゝこと甚だ稀なり、最も必要なる真理は大抵は是れ最も人耳に逆ふ者なり。假令進んで故らに虚言を預言せずとも、我等は容易く此の急切なる誘惑に負けんも知るべからず、是實に急切にして我等に逼迫する者なれば也。是に於てか我等は苦口逆耳の真理を模稜の甘言に包み、或は直接に口に苦からず耳に逆はざるが如き真理のみを談せんとす、兎角我等は眼前の猖獗なる謬見邪説を直接に攻撃せざるが如き事、または聽衆が異議なく甘受悦納するが如き事を獨り(或は専ら)論談しつゝ、其説ける所は毫も

第四講 話

真理ならざりし者の如くにして、實際真理を度外に置き去んとす。此誘惑たるや我等をして單に教理上の大綱を論ずるが如き態を装はしめ、或は議論紛々たる點に陥み入らざるが如き外見を呈せしむる者なるに因て、殊に危険なる者とす。其實は是の如く行なふに於て我等は使徒アポスタトの所行と背馳すること極めて遠き者なり、是れパウロは神の旨を残す所なく悉く宣たりと記されし如く使徒行傳二十の二十七、其群信徒を裨益すべき事をば一も説かでは措かざりければ也。

第三、此外また内部よりと外部よりとの誘惑が合同して我等に真理を墮落せしむる場合あるを見る。即ち我等は時に或にみづから肆にしつゝ、罪なる行爲あるひは愧べき舉動に陥るありて、之が爲に真理を人前に直言するを憚らんとす、如何となれば真理を明言するは是れ稠人の面前にて自己の罪を鳴らすに同じければ也。

サクラメント(聖禮典)を當然に執行するにつきても殆ど是と同様なる困難の妨ぐる者なきに非ず。教義の聖潔を維持するの業を環繞するを

第 四 講 話

只今我等が見たりし諸の困難は、また聖禮典サクレメントの見解にも纏綿して殊に其紛紜の極に達す、而して其理由なるや許多にして見やすき耳、是はサクレメントにつきて我等は唯に羅馬教會と意見の衝突するのみならず、又た内外のプロテスタント諸宗派とも意見の衝突するあるが故なり。

羅馬の教會は紛錯せる蛛網の如き禮制を猛然維持するものなるが、其中には基督の設立に係る單純にして全備せる禮典のみならず、人の案出したる者、人の増加したる者、及び人の代替したる者も多し、因て我等は斯の如き後人の發明に係る禮式を容れ、または後人の増減に係る法儀を恕るゆるさざらんことを斷乎として務めざるべからず、羅馬教會はキリストが未だ啓示したまはざりし者を僭妄にも説明せんと試みつ、聖餐式に於て信者がキリストの御體みかたを眞に與まかり受くるの妙義を肉化質現的に解釋してサクレメントの本意を覆がへすが故に、我等は之に反抗せざんばあるべからず、該教會は神が其心服せしめて拯ふ人々の

第 四 講 話

胸裏に感化更新の恩を種々に垂れたまふの奧秘を或る莫大なる而して又精微に結構せる外部の儀文に専ら歸し去りたれば、我等は飽までも之を暴露して争はざるべからず。

内外のプロテスタント諸宗派所謂新教の諸教會に對してはまた我等はサクレメントに於ける基督の賜物の眞實なる事を主張せざるべからず、基督が其契約にしたがひて其サクレメントに現前ましますの確實なる事を主張せざるべからず、又サクレメントが基督の御靈みたまの由て働くべき直接の暗號及び外部の器具たる者なる事を主張せざるべからず、サクレメントは凡て之が爲に他の職任と其趣を異にす、例へば他の最も神聖なる職任、すなはち祈禱をなす事、聖書を誦む事の如きは、多福多幸なる者なりと雖も、サクレメントには非ず、又サクレメントたるの特榮をも荷はず、是れサクレメントとは即ち平生缺くべからざる規定の通路媒介にして、其正當に施こされ正當に受らるゝ時は、全能者之に由て更生及び一新の必要恩恵を吾人に垂れたまふ者なれば也。

第四講 話

羅馬(天主教)の謬見とゼチバ(カルビン派)の謬見とは兩ながら俱に精神上及靈魂上の或る氣風および性情を表する者なるが故に、我等は彼等に反對して單純の眞理を主張するに當りて、自家の心中にても、信徒の中間にても俱に、萬種の困難を必ず十分に嘗あやまひ知るにいたらん、此等の困難はすなはち上に説きし如く是れ基督教の諸教理を主張する事を多少妨碍する者なりとす。我等は我等自身の傾僻を有せん、我等は半眞理や不具の陳説を甘受するやうに誘惑せられん、多年の宿説を棄るを要せん、己れが精神に固着せる或る定式若くは或る教説を割愛するを要せん。外部よりの困難もまた同様の力を以て我等に來り迫らんとす。我等は斯る嚴に實際的なる件々につきて彼等雙方の極端説と相容れざるべければ、其差違は悉く鋭く排撃せらるべし。是皆またサクレメントと誠規とを實地に施行する事にも均しく當るべし。我等は或は屹然磐石の如くに堅く立たざるを得ざるが如き場合起らん、然るに又是の如く堅く立つことは必らず猛然たる敵對を招か

第四講 話

んとす。
但し我等は如何にして此等の誘惑を防ぐべきか。
第一、何よりもさきに、先づ勞苦と敵對とに遭ふことを覺悟せよ。教師たるの行路は難し。此行路は平坦なるべしとの約束は絶て無し。忠信なる人々は必ず其崎嶇羊腸たるを見ん。平坦を冀ふ人々は共に語るに足らず。諸君は唯に敬天の人たるべきのみならず、又神學者たらざるべからず。此事は固より多分の勞を要す。諸君は謬説邪見に反對せんと務む、されば抵抗に出あはんことを待ち設けざるべからず。
第二、請ふ諸君が求めんと務むる事件の甚だ大なる者なるを熟思せよ。是れ凡そ思慮ある人が努力なくしては、——否な苦難さへも無くしては、到底獲がたしと爲す所の者なり。是すなはち諸君の神及び救主の榮光をなす所以の者にして、一には公會の聖潔を維持するを要し、二には諸君が兄弟姉妹の靈魂の拯救を幫助するを要し、三には懼れ慄きつゝ諸君自身の拯救を招致し、彼の生前に衆を義に教化せし者を大審判

第四講 話

の日に待てる義の寶冠を獲得するを要す。
 第三、祈りて勇を求めよ。人々は概して思ふ牧師或は教職の生活には勇を要すること稀なりと。然れども何の誤か是よりも大いなる者あらん。我等は一擧一動一進一退に最高最珍なる性質の勇を要す、即ち平淡恬靜にして撓まざるの勇。——固より必要の時には奮闘激争をも辭せずと雖も、平素は人前に衒はず、世間の譽を求めざる沈勇を要す。此の如き眞勇は地上の月桂冠ありて待つ無き者なれば、固より其認識を末日まで待たざるべからず、其報賞を未來に求めざるべからず。然れば請ふ切に祈りて、彼の、義者を獅子のごとくに勇ましからしむる眞勇を賜はらんことを求めよ。
 第四、請ふ私見臆説を逞うすることを慎しめ、神が諸君をして之を免かれしむべく與へおきたまへる諸の教誨を之がために用ひて警戒する所あれ。例へば聖書に明文ある件々、または教會に定説ある件々の如きをば、之を理論若くは工夫の類として心裏に之が講究を改開すべからず。

第四講 話

神の御言(聖書)の明文に對して我等が此規則を奉ぜざるべからざる事は我の喋々を須たずして一目瞭然たるなり。聖書の明文は片言隻句も貴重ならざるは無し。諸君もし教義と誠規とに健全強盛ならんと欲せば、聖書を深く學び恒に味ひて其妙理を禱り索ねざるべからず、神の聖言が暗愚者の心に光と穎悟を與ふることは今日も聖詩人の世におけると異なる無し(詩篇第百十九の百卅節を見よ)。但し此外にまた諸君は其屬する教會(公會)の決議を遵奉せざるべからず。諸君は此條件を以て教師の委任を受けたる者なり、若し此條件を果す能はずんば、潔く其職を辭せざるべからず。例へば我が教會は羅馬教のすべての特色を盡く判然と排斥したり、諸君は我が教會の専任教師とならんとするの條件として之が排斥に賛同したり、されば諸君にして今もし其初に排斥したる者を是視するならば、諸君は其の之れが排斥を條件として受けたる聖職をもはや潔く保つことを得ず、是れ諸君の彼の誓約たるや何時

第 四 講 話

にても恒に其初の誓言(羅馬教排斥の誓言)を全然滿腔の赤心を以て尋ぎ且新たにするを得べき者と見做さるれば也。——次に我が教會は判然明言す小兒は皆聖洗(聖バプテスマ)に於て神の力に由て更生すと、而して其サクラメントが不聖潔の手を以て施したる者なるにもせよ、又其の禮典に携さはれる者が單に斯る不敬虔の牧師唯一人なりしにもせよ、若くは亦是と同様に不敬虔なる一保證人之に立あひたる而已なりしにもせよ、其小兒の更生は依然として確實なりと教ふ(大綱第二十九條を參觀せよ)。諸君は此の眞理を十分に承認甘諾する事を條件として已に聖職に就き或は將に聖職に就かんとす。諸君もし此眞理を信ぜざれば、良心に愧ざる者としては該職任を求むるを得ず、又該職任を保つを得ず。されば此等の幫助を忠信に恃み用ひて諸君の心裏に私見臆説の横行するを防げ。

第五、諸君が説く所の教義を健全ならしむべき大々保證なる者、すなはち聖潔の生活に力を用ひよ、不良の生活は自然に異端邪説を心中に

第 四 講 話

發生す、斯の如くまた聖潔の生活は此種の異端邪説——半死の形骸に附着する寄生蟲——を驅除し傷殺す。此保證は極めて貴重なる者なり。故に我は言ふ神に禱する事及び神と交はる事は信仰の清淨と親密に相關係し且つ相待つ者なりと、神の御前に出ては一切清し。諸君神に事ふる時は天上の甘露穰々として諸君の頭上に降らん。我は神の訓諭を守るが故に老たる者にもまさりて事を辨まふとは古聖の實驗説なりき(詩篇百十九の百)人もし神の旨を行なはんと欲せば、此教の神より出るか否やを知るべしとはキリストが凡て狹路をたどらんと志さす人々に自ら諭したまへる辭なるに非ずや。

斯の如き健全の生活はまた諸君をして我が公會の例法と誠規とを施行することを自然に愛せしめんとす。自家のためにも他人のためにも、柔婉なる良心は是れ最良の良心問題學者なり、而して柔婉なる良心は是れ神が聖潔なる生活に恩賜したまふ福惠たるなり。

第六、加旃諸君もし此職任を正しく盡さんと欲せば、愛を以て此の眞

第 四 講 話

理を保たんことを求めよ。唯愛獨り神の隠微なる默示を領會するを能くす。唯愛獨り諸君をして兄弟たちを程よく——賢く、又嚴く、然しなから又無用に怒らしむる無くして——待遇處分することを得せしむ。諸君もし神を愛し奉るならば、餘人は能はざるも諸君は神の教道の奥底にまで悉く窺ひ入るを得ん。諸君もし其牧する群信徒を誠心實意もて愛するならば、諸君は教義上に於ても誠規上に於ても眞理を維持するに堅固明白及び剛毅なるを得べし、而して基督のために諸君は彼等をして諸君を愛せしむるには眞理の外一切を讓るを辭せじ。此事は諸君をして遺憾にも甚だ普通なる一の危険を免かれしめん。諸君は諍競の氣風を勇氣と誤認せざらん、自尊を基督の眞理を愛するの事と誤認せざらん。諸君は却つて萬人に親切なるべく、自ら怒らず、人を怒らさず、慈眼愛腸を以て眞理を衆に頒與せんことを希ひ、決して自己の我意を主張せんことを務めじ。

斯の如き氣象は古來幾多の教師をして失敗と恥辱を免かれしめしぞ

第 四 講 話

や。此氣象を缺き、又此氣象より生ずる謙遜を缺く時には年少牧師にして事を誤らざる者殆ど稀なり。——即ち年少牧師は烈火のごとき熱心を以て新任の教會に入らん、而して其教義に關する口調の卑く、其誠規に關する紀綱の緩みたるを見ん、或は又其最も敬虔なる人々すらも既往の教誨の足らざりしが爲に我が聖公會の特別眞理には甚だ暗かるを見ん、是に於てか忍耐と謙遜とを以て徐々に之を導くことをばせず、——即ち彼等のために禱り、彼等の中に聖潔なる生活をなして彼等の見識を高むることをせず、彼等が現在の知識を日に月に増益し、慈愛白淨なる聖潔交際を以て其中の有志者間に眞理の標準を高め、彼等を媒介として諸餘の人々を教化することをせず、直ちに其周圍の諸人を辨難攻撃し、宛がら異なる福音を攜へ來りし者のごとくに言談し、遂に其牧する群信徒をして己れに遠ざからしめ、其甚だしきに至りては己が(傲慢にも無思慮にも)注入せんと務むる諸眞理にさへも遠ざからしめ、而して其去りたる後には只怒れる、驚ろける、紊れたる教會を遺す而已、

彼が去らんとする脚にて攪き亂せし濁水は多年のあひだ或は清ざらんとす。

第 四 講 話

第七、最後に、兄弟諸君、請ふ祈念の人たれ、神と獨りあること屢なれ、竊かに神と交はれ、諸君の心を屢神にむかひて開け、神に伺候せよ、仲保基督に由て神に近よれ、基督の十字架の下に拜伏せよ、諸君自ら彼の拯救にあづからんとを求めよ、單に之を知ること又は之を證することを以て足れりとする勿れ、自ら之を己れの爲に知れ、諸君の罪を基督の血にて滌はるゝ事、諸君の望を基督の義に堅うする事、諸君の刑罰を基督の十字架に釘けらるゝ事は果して何の義ぞやと知らんことを求めよ、常に大審判日をあぼえて生活せよ、基督を半ば知りて足れりとする勿れ、唯彼の日に至りて耐ふべき物のみを求めよ、十字架の下に就きて基督より教誨を受けよ、基督の約束に基づきて、彼處にて基督の靈を一層十分に心裏に宿らさんことを求め、訓慰師たる聖靈の現前を一層ゆたかに賜はらんことを求めよ、然らば現在のためにも過去のためにも、諸君

第 四 講 話

にとりて一切善かるべく、諸君の教職にとりて萬事亨るべし。諸君よ我等は——掛念なきには非れども又深く頼むの心を以て——諸君を基督の仁慈の御手に托す。諸君は今より最も危険なる戦争に従がはんとす、一たび敗るゝや其不幸寔に言ふに忍びざる者あらんとす。天堂と地獄諸君のために天秤にかゝれり。其いづれに傾くかは一に諸君の爲すに信す。然りと雖も落膽する勿れ、却つて勇め、約束を垂れたまへる者は信義を重んず、決して渝る莫し。彼を諸君の師君とせよ、諸君のために死したまひし者なる彼に諸君の困難なる聖職を倚頼せよ、諸君の秘密なる重荷を倚頼せよ、諸君の靈魂を倚頼せよ、然らば彼かならず諸君の行路をして安全ならしめん。我等の主が昔し自ら指して言ひたまひし事は萬古易はず、曰く、われ此事を爾曹に語りしは爾曹をして我に在て平安を得させんが爲なり、爾曹世に在りては患難を受けん、されど懼るゝ勿れ、我すでに世に勝てり。此等の文字はこれ基督の御辭なり、基督の訓言はすべてこれ至真至實の約束なり、曰く、爾死に至るまで

教義サクラメント及誠規

百十六

忠信なれ、然ば我生命の冠冕を爾にあたへん。(約翰十六の三十三、及黙示録二の十を見よ)

謬見及異端の驅除

「汝は神の道に戻れる凡百の謬見と異端とを公會より驅除し又汝が教養を施すべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私に警め勸告をなすの必要起り又その機会を與へられんとき努めて之をなすの覺悟あるや」

(聖品プレスブテロ派立式文)

第五講話

第五講話 謬見及異端の驅除

基督に於ける兄弟諸君、派立式上に於て次で來るの問は我等が前回の講話において論究したる所の者に最も自然の順序を以て紹介者とす。諸君は其説教の規矩として神の御言——聖書の中に啓示せられたる言——を遵奉せんことを既に誓ひたり。且又諸君は「主の命じたまひし如く基督の教とサクラメントと其誠規とを行なふに常に忠實を盡さんと約したり。而して此約束の辭の中に諸君は我が教會が基督の誠命を承けて之を保つことを隱然告白したり。故を以て諸君は常に忠實を盡して其保管の下に在る民を教へて之を守らしむることを勉めんと聲言したる也。

但し諸君は此の誓約したる積極的教誨のほかにも亦——諸君もし耶穌基督の忠僕ならんとせば——真理を證定すると同時に邪説を排闢せざるべからず、即ち唯に顯正に従事するのみならず、又破邪にも従事す

謬見及異端の驅除

第五講 話

るを要す。是を以てか諸君は此に問はる——
 「汝は神の道（こゝは）に戻れる凡百の謬見（あやまり）と異端とを公會より驅除し又汝が教養を施すべき人々の中に於て病める者にも健全（すこやか）なる者にも公けに或は私かに警め勸告（すすめごと）をなすの必要起り又その機會の與へられんとき努めて之をなすの覺悟あるや」
 此問に諸君は答へて言ふ「主わが助主（たすけぬし）なれば我かく爲さん——幸ひに主の御助をあふぎて事に此に從がはんと、
 備かゝる問を解釋するに當りて第一に考ふべき者は——諸君が今斯く驅除せんと誓約せる謬見邪説は果して何物ぞや——といふに在るや明らかなりとす。但し幸ひにして此事につきては我等の中に一點の疑もあるを得ず此の問の文字やがて疑團をして起るに由なからしむ、即ち諸君はすべて神の道（こゝは）に戻れる言教を盡く謬見（あやまり）および異端と見做すを要す。是非の判定をば宜く律法と證詞（あかし）とに訴ふべし。黄金は聖所の天秤もて量るべくありき。此の規則たるや單純なりとは雖も、其諸君

第五講 話

に命ずる職分は決して困難ならざる者には非ず。實に是れ眞理を直ちに教ふる顯正の事業よりは遙かに難き者にして、更に幾層の鍛煉を要する者と謂はざるを得ず。謬見邪説を首尾よく退治せんには必ず先づ眞理其物（まこと）正説を精細に知悉せざんばあるべからざる而已ならず、又其邪説たる異端の意味と由來を審かにせざるべからず。然のみならず、諸君はその邪見を懐きをる人々の性質氣風および誘惑（おそわ）弱點を十分に了知するを要す。然らずんば諸君の努力は只爭論の怒風を激發して沙塵を飛散せんのみ、到底之が迷霧を解きて眞理の月光を窺はしむるを得じ。
 此事業は斯く困難なりとは雖も、纔かに少しく考がふるならば、其如何に必要なる者なるかは蓋し一目に瞭然たるあらん。要するに是基督教會が立てられたる特別の目的なり。教會は眞理を護持するを要す、——増減強解混入等すべて腐敗せる人心が用ひて以て眞理の純潔をけがさんと日夜に試みつゝある者を排斥して、眞理を全たうせざるべか

第五講 話

らず。教會の將來が聖經の中に描かれたるを見るに、いつも邪説と戦かひをる者に非ざるは無し。即ち我が萬福なる主は言たまはく、偽預言者おほく起りて多くの人を欺むかん」と(馬太二十四の十二)。又言たまはく、「そは偽キリスト、偽預言者たち起りて大いなる休徴と異能を行ひ、選ばれたる者をも欺くことを得ば之を欺くべければ也」と(同二十四の二十四)。聖パウロは僅か己れが死後の數十年を豫想してエペソ教會の長老たちに堅く我が教誨をおぼえて守れと警めて曰く、「蓋我が去らん後、この群を惜まざる暴き狼なんぢらの中に入らん、亦なんぢらの中よりも弟子たちを己に従がはせんとて悖理なる言をいひ出す者おこらんと(使徒行傳二十の二十九、三十)。

テモテをエペソに遣せし時にも彼が命ぜし所はまた正にこれと同じかり、曰く、爾なほエペソに留まり、人に命じて彼處に異なる教理を傳ふること無らしめよ」と。パウロはまたテモテに諭して曰く、破邪の戦は速かに終を告ぐべき者にあらずして、却つて益々熾んならんとす、悪き人

第五講 話

と人を欺く人は益々惡に進み、人を惑はし亦人に惑はさる(提摩太前書一の三、後書三の十三を見よ)。選ばれたる人々が盡く集められ、多福の結局が來らん時まで、いつも斯の如くなるべし。預言の辭は此點において甚だ明かなるに非ずや。曰く、昔し民の中に偽の預言者ありき、其ごとく爾曹の中にも偽の師いでん、彼等は淪亡に至る異端を傳へ、且ちのれを贖ふ主を主とせずして速かなる淪亡を自ら取べし、また多くの人がかれらの邪説をたどらん(彼得後書二の一二)。否な、終にいたるまで其光景は依然として同じ、只かの久しく延たりし終末の近よるにしがひて其景色ますます暗澹たらんのみ、而して其景色つひに凝りて一點の大黒塊となり、最後の大敵——アンテクリイスト——現はれて暫く凱歌を奏するに至らん、即ち聖書に、其時に至りて不法の者あらはるべし、主イエスその口の氣を以て彼を滅ぼさん、其來るとき顯はす所の榮光を以て彼を廢せん」と説ける者は是なり(帖撒羅尼迦後書二の八)。

されば兄弟諸君、此の惡き世に於てキリストのため終見證をなす

第五講 話

事は是れ教會の常職恒任なりかし。此事業——眞を顯はし假を破る事——をなすためにこそ我等は一箇の團體に集合したるなれ。此事業を爲すが爲に我等は聖書——書記したる神語——を有す、是なき時は一統の教會(普公會)ある能はず。是れの見證者及び看守者は教會なり、是れの中には一切の眞理ありて確然明記せられたり。教會が之れの指導を仰ぐときには、其周圍の暗を破るの明光いつとなく教會の需にしたがひて是れの中より、灼然として照らし出づべし。之を其首要なる教理につきて解釋せんとするには、古代の公禮拜式文あり、若干の信經ありて我等のために嚮導となる。殊に此等信經の各條毎節は古戰場の記念碑にして、信仰の道が初は攻撃せられ、終には勝利を得て確かめられ明らかめられたるを標榜す。否な唯に此の如き公禮拜式文(リタルヂ)及び信經ありて吾人を輔くるのみならず、此等よりも幾層長き是認——天下一統の基督教會における凡ての世代および凡ての部分の是認——ありて吾人のために嚮導となる也。

第五講 話

されば破邪の事たるや基督教會の特別なる職分と謂ふべし。此事業のために神は教會に鐵鎚を附與したまへるなり。教會内に在ては此職務は特別にも是れ我等教師たる者の任なりとす。我等教師は是れ神の國が取りたる者にして、其目的たるや我等をして神が我等と我等の兄弟に與へたまひし聖物を守護せしめんとするに在るなり。我等が團體あるひは社會には其上下尊卑を論ぜずして此職分特別にも之に屬す。此の職分は我等の中にて大中學の教師たるべく天定せられたる者に屬す。兄弟諸君、實に諸君は高檣に守望者として立てるなり。諸君の眼界には萬里の原野ありて横たはれり。諸君は、若し意あらば、將來に臨まんとする危険の何たるかを早くより少年社會の風勢に徴して看破するを得べし。諸君は正に此事業或は目的のために餘暇を有し、才能を有し、既往の累積せる知識の富を悉く有す。されば何時にもあれ必要の時には諸君は其の沈着なる觀察、舊來の眞理、および基督教的なる學問の金城鐵壁内より武器具足したる勇將猛卒を雲のごとくに派遣すること

第五講 話

を得ん。領分こそ異なれ、田舎の牧師もまた同じく之を以て其職任となすや論なし。凡ての群には虚妄の教師ありて入らんことを求む。虚偽の靈の活動に由て各種の邪説は非常の速力を以て津々浦々にまで進入す。恰も疾風ありて其無數の種子を東西南北に吹き散らせし者の如く、恰も魔力ありて之を其地下の睡眠窟より喚び出せし者の如し。是の如く當世の氣風に投合する異端邪説我等が全く安全なりと思ひおたらん地にも一夜の中に叢生せんとす。是故に我等の中凡て其職任を盡さんと欲する者は唯に進んで眞理を人心に注入せんとす。其決心をなすを要するのみならず、又不眞理(邪説)を驅除して、容易に之が犠牲たらんとする輕はづみの人々を救はんとの決心をなすを要す。

今日の世は此の如き事の例證を吾人に興ふること嗟如何に夥しきぞや。異端邪説は如何に廣く傳播せしぞや、如何に偏く自ら再生し自ら發衍するぞや。此等の異端邪説は社會主義及び萬有神教を以て其最も發達したる宗義となすと雖も、其普通の根本は今日に一般なる不信の傾

第五講 話

向趨勢中に存す、而して此不信たるや諸般の固定不朽の教説を盡く疑がはんとする者にして、神の御言に依て之を判するに、是れ末世の大徴候たること明らかなる者に似たり。假令一見最も善く防衛せられたりとは言へ、誰か説くを得ん我が群は安全にして此等の欺騙にかゝるの恐なしと。誰か此の賊黨を其特有の領分より驅逐すべき必要の武器を神の眞理の充實する庫より引き出さんことを即時に要めらるゝこと無きを保すべけんや。

但し假令此の職分は始終教會の肩上に在る者なりといふを知ること割合には容易なりとも、又此事たるや教會内に在て其兄弟のために働く人々にとりて極めて肝要なる一職分たりといふを知ると割合に容易なりとも、我等の中多分何人にとりても如何に其職分を盡すべきかを知ることは決して然か容易なる者に非ず。因て今此の實際問題に聊か論及するあらんとす。

此にても余は斷言せんとす、我等もし此點において其職務を辱かしめ

第五講 話

ざらんと欲せば、必ず先づ眞理を勉め學びて以て自ら攻守の準備をなさざるべからず。我等は不時の急要に應じて揮ふべき兵器武具を盡く善はへたる寶庫を有せずんばあるべからず。其牧する群信徒よりも只少しく進みざるが如きは未だ足れりとせず、周囲の百事百物が紛々として纏れたる後に始めて緒を尋ねるが如きは既に晩し、散亂せる人衆が我等のまはりに集まり來りつゝ、其狼狽周章の餘り、切に我等より安全の道を指示せられんことを仰ぎ望むに際して、俄かに自ら道を看出さんと試るむるが如きは宜しからず。乘れる船が既に激浪怒濤の中に在るに及びて始て海圖を學ぶが如き愚をなすべからず。我等の心は預め十二分に知識をたくはへざるべからず。是に於てか我等が一切の神學に精通熟達せんとし既往における眞理と虚偽との衝突史を十分に學ばんこと極めて必要なりとす。如何となれば新異端は概して唯これ舊異端の再生せる者なれば也。是に於てか彼の吾人が爲に凡て必要な學問を載する多福の聖經の言語を深く究め詳かに辨まふること至

第五講 話

りて必要なりとす。皮相の智識は何の用にもたゝず、其虚偽に表するに聖書よりの引證文句を以てするは悪魔の故智にして、衆を欺く慣用手段たる也。悪魔は此の手段を以て我が萬福の主を試みたり、彼は自ら光明の使の貌に變ずるの法を善く知るが故に、屢この計畧を用ひて善男善女を陥れんとす。古來基督教會を煩はせし異端は十中八九みな聖經の辭句を引きて其所説を是證せんと試みたり。異端家は前後相ついで皆幾分かワレンテマス(Valentinus)の擧に是れ倣ふ、テラタリアンの曰く、ワレンテマスは聖書の本文を取て取舍せず又は改易せざりき、是は彼れ己れが説にかなふが如き意味を聖書のために案出したれば、別に己が説にかなふが如き聖書を作るを要せざりしが故なりと。異端邪説の徒古今大抵皆然り。此種の異端邪説を辨駁し去らんには、聖書を善く知りて之に反對するが如き或る文句を提出し得る而已にては未だ足らず、如何となれば斯の如くにして答辨するは是れ聖書の本文を以て聖書の本文に當るなれば也。斯の如き謬見を、眞に駁倒せんには、聖書の

精神を十分に知悉するを要す。我等は論者の提出せる本文は聖書全體の精神に悖るが故に妄用なりと説破することを得ずんばあらざるべからず。

此にありては我等が萬福なる主の典型儼然吾人の眼前に在り。——「人の子」として基督は虚誑者の父と相戦ひたまへり。後者が聖書の語をひきて——「爾もし神の子ならば己が身を下へ投よ蓋なんぢが爲に神その使等に命ぜん、彼等手にて支へ爾が足の石に觸ざるやうすべし」と録されたりと言ふや、基督は——「主たる爾の神を試むべからずと亦録せり」と説き給へり。主の此辭は人が神に對する關係の基本たる大法則を述べて虚誑者の屋氣樓を一言に吹き消し了りぬ、如何となれば是れ彼が引きたる聖書の句の徹頭徹尾妄用なることを一目に瞭然たらしめたれば也。我等もし聖書に基づきて聖書の妄用を防がんと欲せば、我が主の典型に則とらざるべからず、而して又我等が「亦録せり」と答ふることは、單に聖書の本文を以て本文に答ふるに止むべからず、濫引妄用を

第五講 話

第

五

講

話

證明して敵の口を箝し得るが如くに聖書の確實なる或る主義に基づかずんばあるべからず。聖書を斯く用ひんには須く先づ之が深さを量るべし、之が精神を握むべし、之が原則大法をしかと捉ふべし。

斯く謬見を排除するに於て我等の職任を盡すに缺くべからざる者として我が諸君に講ぜんと欲する第二の點は、是もまた此第一の準備と粗その類を同じうす。——即ち先づ基督教の眞理と教義との全體を基礎として其上に我等の信徒を預め建設するを要する是なり。是れ實に一大事件なり。彼等が異端邪説の餌食となるは、預め眞理の全豹を窺ひ知らざるに是れ因る。病身なる者は何れの時疫にも速かに感染す。——礎石の堅からざる城は敵の一撃に崩る。斯の如く我等の信徒が其街示せらるゝ邪説謬見にたやすく心酔し、其信仰の城塞が容易く敵軍の前に陥いるは、彼等が靈態の卑く、彼等が信仰の基礎の堅からざるに因る而已。我等は其信徒を斯く眞理に基みせしむるに要する多分の勞をすること無くして動もすれば安を偷みて休まんとする者なれば、此事を

第五講 話

心に記すると特に必要至極なりとす。我等の懶惰なるや甘き口實または遜辭を以て自ら恕するに敏からんとす。即ち我等は妄想して曰ん、我等が牧する信徒の如きは此等の大真理を其萬殊なる關係につきて理會せしめ得べき者にあらざ、何事にまれ一事を教ふるを得ば大出來とせざるべからず、平易なる實際的の教誨にて彼等の力は既に竭く、要するに彼の多忙なる不注意なる、半解的なる群信徒をして神學者たらしめんと務むるよりは、彼等の注意と我等の注意とを眼目たる二三の要點に凝集することを得策ならめと。懶惰が忠告者にして、我等の未熟なる心が聽聞者たる時には、必ず或る口實または遜辭浮み出でん。然りと雖も我等もし其職を辱めざらんと欲せば、勞に服せざるべからず、骨を惜むべからず。概して之を言へば、病魔の既に膏肓に入りたる後に及びて之を驅逐せんと試むるは抑も晚し。我等の信徒は初めて耳に來りさしやく虚誑の辭を聽くことを斷然と拒むやうに預め薰陶せらるゝを要す。教會にて彼等のために設けたるは即ち此の薰陶なりとす。我等が多

第五講 話

幸多福なる主の首要なる行事および遭遇を恒に記憶せしむるために若干の祭節を設けたる智慮の意味は此に在り、是れ主の生活すなはち我が信經の諸大真理が由て開發し來れる根源なれば也。又一層深妙幽玄なる信仰箇條をすらも載る種々の歌頌を一般に用ひしむる智慧も此に存す。是れ裸體の真理を哲學的に説き出しては其難解に辟易せん無學の人々も斯の如く或る耳なれたる歌頌の句中に於て同一の真理を深く胸中に宿すに至らんとすれば也。我等もし信徒をして信仰に堅固ならしめんと欲せば、我等の聖職をして此の如き者たらしめずんばあるべからず。昔日の異端の名稱や年代や譚話などを以て徒らに彼等を疲れ倦しむること無く、教會の教ふる所に循ひて、真理の全軀を以て周到に堅牢に彼等を建立せんことを務むるを要す。斯の如くにして今まで行なはれたる邪説——否な復も行なはるゝに至らんとする恐ある邪説——を聞き排ぞけて、之と反對なる真理に彼等信徒を固うするを急務とす。此關邪の業は我等の説教を以て、我等の訪問を以て、我等の

第五講 話

問答を以て、及び我等の學校に於て、之を成さるべからず。特別にも我等が彼等の靈魂中に織こまんとを要する大真理は、——至聖全能なる神の靈知者たる事、——萬福なる三位一體の妙理、——人類の墮落および其腐敗、——罪てふ者が人類の身上に艱難と汚穢を引起したる事、——福音を以て世を救ふといふ父神の無始よりせる聖慮、——我等の萬福なる主と崇むる御子の受肉降誕、其完全なる生、其無缺なる死、其十全にして餘あるの救贖、——聖靈の下賜、——教會の特恩、——サクラメントに基督の現前まします事、——箇々の人が更生して聖潔なる者となるの必要、——審判、拯救および天國、地獄等是なり。以上の要點を以て我等は凡て己れに托せられたる人々の心裏に真正の知識を注入せんことを務めざるべからず、是れ彼等が由て以て攻撃せらるべき種々の惡疫の預防たる者また消毒たる者なれば也。

且又此の概汎なる準備の外、我等もし此の點において其職任を十分に盡さんと欲せば、特別なる異端あるひは謬見の起るを先見して之を未

第五講 話

然に防遏せざるべからず。諸君がかけられたる問の辭は善く肯綮に中れる者なり。即ち諸君は唯に謬見邪説をことごとく驅除せんとするやと問はるゝのみならず、又其上にも之を驅除せんと覺悟するやと問はれたる也。覺悟すとは用心してあるを謂ふ。諸君はされば火箭が雨のごとく降り來る時其火の未だ燃つかざるうちに之を捉んで投のけんと待構ふる人々の如くするを要す。是れ教會の職務中にて甚だ急務なる者なり。此職務は教會に其先知的なる品質の結果として自然に屬する者です。教會は時勢の風潮を發見するに敏からざるべからず、將に來らんとする困難の前兆を預め卜知するを得ざるべからず。我が意味を例證せんために我は此に一事を掲げんとす。而して其事たるや著明なる前表に由て今日我等が將に來んとする危険と容易に斷定し得べき者なり。他なし是すなはち今日世人が一般に聖書の天啓を疑がはんとするを謂ふ。斯の如き懷疑の我等が眼前に在るにおいて、我等が之を辨駁して懷疑家の惑を解かんことは必然に是れ如何に至極必要なる者

ぞや。我等は其件の全體を精細に査察するを要す、何を基礎として我が大真理を辨護すべきかを知るを要す、暴風大雨の頭上に未だ臨まざるに先だちて其群羊を喚あつめて天啓の真理の牖戸内に之を安全に臥さするを要す。案ずるに我等が斯く其將に來らんとする困難或は危険を預め看破し得ると否やとは通例我等が平素の靈狀(信仰)如何に依て定まる者とす。若し自ら罪を犯しをるあり、又は徒らに偷安を事としをるあらば、其人の目くらみて、到底神が天に垂れたまふ警戒の兆を讀み解くを得ず。之に反して神と交はりをるに於ては、其人の眼ひらけて、危険を未萌に看ること天光の如く速かに、困難を未然に制すること天兵のごとく聰からんとす。是みな神に近づき棲むよりする大福祉なり、即ち是れ恒に禱り、目を醒して警しめ、謹んで順がふの福德たるなり。此福を獲んと欲せば、須く神とともに歩むべし。

「神の言に戻れる凡百の謬見と異端を驅除するに當りて此外に尙一の重要な覺悟ありて存すといふは他なし、斯の如き謬見及び異端の強

處または誘惑は果して那邊に在るかを了る事なりとす、如何となれば此等の邪説は之を究むるに必らず或る真理と親密に關係する者なればなり。謬見の隨伴物は屢ちのづから人間に歡迎せらるゝと例へば淫猥なる禮式のために偶像祭祀が屢々不徳の世に持囃されたるが如し。然れども、虚説は、單に虚説としては、古來少くも我等が見うる限りは、廣き又は深き勢力を人心に及ぼしたること無し、邪説謬見が大なる勢力を有するあるは、一に曲解、枉説せられたるの、真理として然る者とす。サタンの智巧は屢この點に於て著明なるを見る、是れサタンは一世代または一國民が其の形勢若くは境遇上目下要する裸躰の真理を虚説の糖衣中に包むに甚だ巧みなる者なれば也。教會にとりて斯の如き場合に際して、固より他の凡ての場合に於ても多少然らざるは無けれど、邪説の傳播を有功に防ぎ得べき唯一の方法は、其猖獗なる謬見を以て曲解、枉説せらるゝ、真理を毅然として主張し、敢然として唱道するに在りとす。但し此の運動たるや強勁の信仰を要し、専心の峻節を要す、其

第五講 話

謬見に親縁ある眞理を十分に陳説する事なく、宛がら目下これを論ずるは危険なるが如くして、之を姑く不問に措き、而して其曲解枉説せられたる眞理と混合せる邪説の正反對なる眞理を最大重要なる者として提出し、其邪説をは大聲疾呼して之を罵り雷轟電撃して其異端家に逼迫するは、もとより遙かに容易なる事とす、然りと雖も是れ邪説を駁倒するの眞道にあらざるのみならず、又百戰百勝の長策にあらざ、畢竟斯る謬見をして勢力あらしむる者は、然か曲解枉説せられたる眞理なること前に説けるが如し、故に若し斯の如くして之を駁倒するならば、左の如き惡結果の一かならず續て起らんとす、即ち或は邪説を驅除するにあたりて其邪説の附着せる眞理をも併せて失ふに至るべく、而して教會は一極端の危険をいで、他の一極端の危険にに奔せ入らん、是れ教義の爭論史中に珍らしからぬ出來事なりければ也。——或はまた其謬見を驅除せんとして全く失敗せん、是一層屢おこる事なれば也、何を以て之を言ふや、我等もし單に其邪説を轟々罵るのみならんには、我

第五講 話

等と合して之を排斥する人々すらも、其邪説のうちには彼等が憎む所の虚説のほかに向或る者ありて存するならんと感じざるに至らんも知るべからず、而して我等その或る者の何たるかを示さざるが故に、彼等は之を幾分か観るべき者ならんと感じて全然之を排斥せざらんとす、而して又之に惑はされたる人々は其新説の中に我等が攻撃の届かざる或る者ありと衷心に感ずるに因て、凡ての排撃を不公平と見做しつゝ、我等の拙策のために却つて益々深く其懼るべき虚説に執着せんとす、之を大にしては古來基督教會に滔こりたる諸大異端の歴史、および之を小にしては最も成功の著しかりし教區的分裂の歴史、俱に此事の虚ならざるを善く例證すと謂ふべし、基督の後最初四百年間猖獗をきはめし異端の興廢——フーケル(Hoekel)が椽大の筆を以て描き出せし者——は之が第一の危険を吾人に示す、其第二に至りては分争の盛んなる教區は殆ど皆以て之が例となして引くを得べし、各時各代は同一の訓誨を繰かへして吾人を警戒す、例へば左に掲ぐる

第五講 話

が如き眞理よりは何物かまた倍して貴とからん、——曰く人は神の御靈に其靈魂を變化更新せらるゝに非れば生命に入る能はず、——曰く神は震怒を静めて我等の御父と成り、キリストを以て我等の罪を清め、我等をして愛子として神の御前に歩むとを得せしめ給ふと知るは忠信なる信徒が此下土にて享受する多福の特權なり、——曰く我等は一方に良心を有するが故に、他方には又之に對するの具として私かに是非を判断すべき權理を附與せられ又之を行用するを要す、——曰く贖なはれたる人々の教會には固より此世の牧師の直接に來り助くる無くとも、活ける恩恵は徧く衆に光被すと雖も、解罪、指導、及び慰藉の施行に至りては、凡ての悔悟者必らずキリストの聖職員の手より之を恭く忠實に受領するを要す、——再び我は言ふ、天下また此等の眞理よりも貴重なる眞理あらんや、然るに此等の必然なる眞理を輕々しく説く事によりて茲に一連の異說謬見を喚起し來り、遂に其各種の異說謬見をしてそれぞれ此等の眞理の一を執へて城廓となし以て福音界に割據

第五講 話

するに至らしめたり、但し此等の異說謬見の如きは如何にして之を矯正すべきや、他なし是た其かく曲解枉説せられたる眞理自身を猛然として明言するに在る耳、眞理その物および之を信するより來るべき諸の福祉は、只これ教會の親交および教誨を以てして始めて堅固に保たるべく、始めて十分に享けらるべき者なりと云ふことを我等の群信徒に説き示すに在る耳、此等の眞理を措きて論ぜずして、徒らに之が妄用曲解を器々罵るのみにては決して岐路に迷ひ入れる人々を挽もどす能はず、斯の如き異說謬見が銳意を以て信受せらるゝは、人々の渴せる靈魂が其必要を感ずるの甚だ強きを示す者とす、因て我等は偽教師輩が曲解缺損せる眞理を其眞面目のまゝに敢然公然歡然と宣言してこそ始めて彼等の勢力を我等の群信徒の胸中より掃蕩し去ることを得べきなれ、我等の信徒をして異端邪説の浸染を免かれしむるには是よりも大緊要なる規則ほとんど有る無し、——謬見邪説が據て以て金城鐵壁となせる其眞理は果して如何なる者なるかを見よ、而して其眞

第五講 話

理を力として彼の異端——此真理を妄用するに由て勢力ある者たる
 謬見邪説——を攻撃せよ。
 兄弟諸君、こゝに尙一つの規則ありて、是なくんば、我等の爲す所は悉く
 徒勞ならんとす、即ち我等は愛を以て精神として異端を攻めずんばあ
 るべからず。智者の忠告に力あるは一に之が爲なり。愛を以てすれば何
 事も言はれざるは無し、否な愛を以てすれば言ふ所として耳をよるこ
 ばせざるは無からんとす、愛する者の傷つくるは眞實まことよりす、箴言二十
 七の六、人ありて某教師に問て曰く、師が牧せらるゝ群信徒は如何にし
 て師の直言を忍び怒らざるやと。其答に曰く、我が彼等を愛するを彼等
 みづから知るが故なりと。但し此の如き好果を結ぶ者は眞實の愛なら
 ざるべからず。是れ決して單に舌端に親愛の言辭をとなふる者の能す
 べき事に非ず、是れ基督の十字架の下もとにて學びたる衷心の熱愛ならざ
 るべからず。此愛は親切の言動となりて何時にても速かに發するより
 は寧ろ平素の生活上に靄然として顯はるべき者とす。其愛にして眞な

第五講 話

る時は自然に己に克ちて安佚快遊慢交等を棄て、朝にも晝にも晩にも、
 凡て機を得るときには、病わづる者をも健かなる者をもともに訪ひつゝ、泣
 く者とともに泣き喜ぶ者とともに喜び、また若き者を教へ、哀しむ者を
 慰め、迷へる者を喚もどし、弱き者を堅うするに至るなり。斯る愛あると
 きは其牧師の人物は會中の衆人に善く領會せらるゝ者となる、而して
 其人物たるや終には何人も抵抗するを得ざる者とならんとす。謙遜と
 同情とは眞實の愛に本來侍婢たる者にして、其愛の發する凡ての辭に
 與ふるに優美と潤色とを以てす。勤勉はすなはち之が子なり。疾患者と
 健康者とに兩ながら對する公私の警戒および勸告はすなはち之が必
 然の結實成果なりとす。
 但し諸君もし愛を以て異端邪説を驅除せんと欲せば、諸君の托せられ
 たる群のために禱らざるべからず。恒に其群信徒の爲に禱ることは、如
 何なる度にまで其牧師をして彼等に對するに宜きを得せしむる者な
 るかは誠に驚歎するに餘りあり、即ち此習風は漸々に牧師をして罪人

第五講 話

に對する憎惡の念を(縦や其人頭として過を改めざるとも)和らげしめ、牧師をして、愛を以て眞理を語るの如何に難き者なるかを曉らしめ、彼をして完全なる信と完全なる愛の唯一無二なる大模範たる者に謹んで傲ふことを得せしむ。

兄弟諸君、異端謬見を排除するの道宜く斯の如くなるべき者ならば、我等が負へる職任は決して輕易なる者に非ず。是れ實に我れの贅言を須たずして一目に瞭然たるなり。然り、斯の如く準備に致々たらん事、斯の如く困難を未然に察せん事、斯の如く眞妄の混和を辨別せん事、斯の如く其群信徒を教導するに忠實勇敢ならん事、就中斯の如く勤勉謙讓にして、心より彼等を愛し且恒に彼等のために禱らん事——もろもろ斯の如きは、我等の如き人々には實に最も困難なる者なり。然れども是れ我等が職分なり、諸君が今より擔任せんとする者はすなはち是なり。請ふ無事安佚の生をおくらんと夢想して此聖職に就くこと勿れ、其もろもろの重荷を見て之に負^おべき力を求めよ、庶幾くは之を負^おはせて終

第五講 話

に之が金冠を取ることを得んか。

兄弟諸君、神の絶大なる慈惠の中には諸君の力となるを得べき力あり、諸君の冠となるを得べき冠あり。諸君よ茲に神の恩惠の賜物ありて、諸君もし求むるならば諸君の賜物とならんとす、此等の賜物は諸君をして忍耐強からしめ、賢明ならしめ、勇敢ならしめ、勤勉ならしめ、熱愛ならしめ、常に禱らしめ、諸君の願望は神のため及び人のために斯の如く働かんとするにありとは雖も、自ら其心を顧みるに、目下にありては、此等の恩惠の痕跡きはめて寡なくして、多分絶望に瀕するあらん。然りと雖も、落膽する勿れ。神は、すべての恩を多く與ふるを得たまふ、唯に諸君にむかひて之を爲したまふのみならず、又諸君の心中に之をなしたまふ。諸君が全く恃み難しと知る所の弱れる心を神に任せて奮發せよ、神は諸君に其救主の十字架と傷と愛を示したまはん。神は諸君をして内心の經驗に由て此等の事の力を知らしめ給はん。彼の内部のすべての業を成したまはん者はまた諸君の必要にしたがひて其他のすべて

第五講 話

の供給をも垂れたまふべし。神は「我なんぢを遣はすにあらざや」といふ力強き辭を以て重き口を軽くし、訥る舌を開きたまはん。然り、兄弟諸君よ、我等は之を以て己れのカとするを要す。基督教の聖職は神の制定したまへる所なり、神は其御手の業を棄たまはじ、又は其御約束をして地に落しめたまはじ。神は我等の弱きを用ひて其御目的を成したまふ。此眞理を躬行せよ、是れ大いに諸君の弱きを勵ます者なれば也。諸君の祈禱に力をそふる様にこれを用ひよ、諸君が日々の聖職執行上に於て一箇の眞理として之を守れ。但し諸君が主の使徒たちの眞相續者たるに因て附與せられたる權力をば、假令いかほど其由緒確實なりとも、諸君の説教上または講話上にて、之を大いに主張する勿れ、只使徒たちの繼嗣者に屬する品質を無言に、無聲に、謙遜に表出して足れりとせよ。諸君よ、群信徒を養ふことに第一たれ、群信徒のために禱ふことに第一たれ、群信徒のために苦むことに第一たれ。諸君が牧養する群にして諸君の勞を感謝せずとも、氣をおとす勿れ、是れ珍らしき事にあらざればなり。

第五講 話

キリストが其使徒たちに宣ひし詞を記憶して忘れざれ、——「僕は其主より大ならず、……人もし我を窘なば爾曹をも窘め、もし我言を守らば爾曹の言をも守るべし」(約翰福音書十五の二十)。キリストのために柔和に且謙りて此等及び其他のすべての苦を受くる者には十二分の報賞あるべし、即ち凡て忠信なる者をば、生命の冠冕ありて之を待つなり。寔に是亦キリストの深愛より來る者とす。寔に我等の如き者にとりては神に仕ふるの身となりて神の宮廷に伺候し、且其同胞兄弟のために盡す者となれるは、是れ十分に大なる賜物なりと謂ふべし、我等の勤むる所は善くとも缺點がちなる者なれば、時々之の休養を賜はり、併せて又未來の安息を暗示せらるゝは、報賞の厚き者と謂ふべし。否な、然のみならず、我等は「命ぜられし事をみな爲したる時」も、無益の僕なれども、神は更に是よりも大なる者を賜ふ、即ち我等が殆ど寸功なき時にも神はわれらに金冠を予へたまふ。茲に神の恩言の在るあり、我等をして感謝の充ち實てる心を以て之を觀念せしめよ、——我等疲勞または絶望

第五講 話

を以て昏倒せんとする時には、之を回憶して勇を鼓し氣を勵まされしめよ。曰く——「穎悟者は空の光輝のごとくに耀やかん、又衆多の人を義に導ける者は、星のごとくなりて永遠にいたらん」但以理書十二の三。大審判の日にいたれば、唯に我等みづから救はるゝのみならず、キリストの御血われらを洗ひ清むるのみならず、九淵われらを吞滅せざるのみならず、又寶血を以て我等を贖ひたまひし者われらをして彼に事ふるの情願を起さしめ、其情願をして成就せしめ、而して其成就を報賞したまふ。萬物を創造したまひし者、我等のすべての業を我等のために成したまへる者、我等を地獄より贖ひ給ひし者、我等の不潔をきよめ、我等の弱きを強めたまへる者、すべての正しき志を我等にあたへたまへる者、其大御手の諸工を祝福したまへる者、何よりも超えて先づ其極めて厚き約束の辭をわれらに垂れたまへり、曰く「爾死に至るまで忠信なれ、然ば我生命の冕を爾に予へん」黙示録二の十。

第六講 話

病健兩者の勸戒

第五講 話

を以て昏倒せんとする時には、之を回憶して勇を鼓し氣を勵まされしめよ。曰く——「穎悟者は空の光輝のごとくに耀やかん、又衆多の人を義に導ける者は、星のごとくなりて永遠にいたらん、但以理書十二の三、大審判の日にいたれば、唯に我等みづから救はるゝのみならず、キリストの御血われらを洗ひ清むるのみならず、九淵われらを吞滅せざるのみならず、又寶血を以て我等を贖ひたまひし者われらをして彼に事ふるの情願を起さしめ、其情願をして成就せしめ、而して其成就を報賞したまふ。萬物を創造したまひし者、我等のすべての業を我等のために成したまへる者、我等を地獄より贖ひ給ひし者、我等の不潔をきよめ、我等の弱きを強めたまへる者、すべての正しき志を我等にあたへたまへる者、其大御手の諸工を祝福したまへる者、何よりも超えて先づ其極めて厚き約束の辭をわれらに垂れたまへり、曰く、爾死に至るまで忠信なれ、然ば我生命の晷を爾に予へん、黙示録二の十。」

第六講 話

病健兩者の勸戒

「汝は神の道に戻れる凡百の謬見と異端とを公會より驅除し又汝が教養を施すべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私に警め勸告をなすの必要起り又その機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや」

(聖品プレスナテロ派立式文)

第六講話 病健兩者の勸戒

兄弟諸君、前講話に於て我は本題の前半を諸君とともに講究したり、請ふ先づ此に再び該問題を掲げ出し、然る後例に依て聊か論ずるあらんとす、

「汝は神の道に戻れる凡百の謬見と異端とを公會より驅除し又汝が教養を施すべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私かに警め勸告をなすの必要起り又その機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや」

此問を周到に講究せんために我は先づ謬見異端を驅除するの一點に諸君の思想を凝集せんことを務め、此誓約より生ずる義務の何たる及び其義務を盡すべき道如何んを諸君に示さんと試みたり、因て今は本問の後半を擧げて其中に含まれたる重要な意味を講出せんとす、一言を以て之を蔽へば、是れ諸君が私の教會事業を總括する者とす、此

病健兩者の勸戒

「汝は神の道に戻れる凡百の謬見と異端とを公會より驅除し又汝が教養を施すべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私に警め勸告をなすの必要起り又その機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや」

(聖品プレスプロテロ派立式文)

第 六 講 話

第六講話 病健兩者の勸戒

兄弟諸君、前講話に於て我は本題の前半を諸君とともに講究したり、請ふ先づ此に再び該問題を掲げ出し、然る後例に依て聊か論ずるあらんとす、

「汝は神の道に戻れる凡百の謬見と異端とを公會より驅除し又汝が教養を施すべき人々の中に於て病める者にも健全なる者にも公けに或は私かに警め勸告をなすの必要起り又その機會の與へられしとき努めて之をなすの覺悟あるや」。

此問を周到に講究せんために我は先づ謬見異端を驅除するの一點に諸君の思想を凝集せんことを務め、此誓約より生ずる義務の何たる、及び其義務を盡すべき道如何んを諸君に示さんと試みたり、因て今は本問の後半を擧げて其中に含まれたる重要な意味を講出せんとす、一言を以て之を蔽へば、是れ諸君が私の教會事業を總括する者とす、此

第六講 話

問は固より公けの勸戒をも含むと雖も、是れ前に、説教の事を論ぜし時に粗説き盡したる者なれば、今は姑く措て、唯私の牧會事業のみを講せんと欲す。

されば此誓約は如何なる義務を諸君のために生ずるや、諸君はまた如何に其義務を盡さんとするや。

是より緊要なる問は復あるべくもあらず。諸君が聖所に於て又講壇に立ちて執り行なふ所の職務は、諸君が牧會事業中の尤も著明なる者なりと雖も、牧會事業の成敗は平生における私の勸戒の行届くと否らざるとに由て大いに定まる者と謂はざるを得ず。此の私の勸戒たるや、或は傍觀者の看過する所とならんと雖も、諸君の群信徒は却つて公けの執職におけるよりも深く之に由て諸君の強弱を感ぜん。

諸君が聖職の力あると充足れるとは、神の祝福に由て實に此等私の勸告をこそは待つ者なれ。是れ信徒のためにも諸君自身のためにも俱に甚だ大切なる者なり。先づ其信徒のために緊要なることは許多の理由

第六講 話

の在るあり、請ふ其が二三を諸君の前に指點せん。

先づ親密なる私の交際あるに非んば、—— 勞を厭はずして箇々の信徒のため、苦心焦慮することあるに非ずんば、諸君は決して群信徒をして諸君を領會せしむるを得じ。如何なる觀念に出會ふとも直ちに之を其種々の結果と關係とに推し究むるを得るは教育の一大功德なりとす。一條の琴線を彈てば、許多の琴線これに従ひて擺搖す、—— 一節の調子を鼓するや、聴耳の者は其全曲を早くも想像す。然れども教育にして乏しきときは、精神遲緩にして、其學びたる所の者を遠き結果にまで推し究むる能はず。是故に我等が説教の一部分たどひ實際領會せられたりとても、聽聞人にして教育足らざる時は、決して我等の眞の意味を曉りたりとは謂ふべからず。如何となれば彼の意味を正しく領會せんには、一二の部分に明瞭に理會するのみにては未だ足らず、屢々或る思想または觀念を細かに推究むることを要する者なれば也。然るに斯る思想または觀念は、全體には充つと雖も、特別なる直接の問題としては單

第 六 講 話

に遠く徹かに論及せらるゝ而已にして、教育の全たからざる聽聞人の心には朦朧として辨知すべからざるなきを保せず。然し乍ら信徒もし我等の言ふ所を理會せずば、斯道を何處より如何にして學ぶべきや、彼等單に斯道の教義を受けて之を保つにありて、許多の困難に出あふを免かれずといふ事は、極めて明瞭なりとす。諸の異端の歴史は凡て此事を明らかにす。異端とは畢竟是れ墮落せる人心が宗教と稱する神の眞理に替へんと自然に希圖する謬見邪説なれば也。然るに縦や剗切なる説教を以てすとも、其説教にして僅かに一部分しか理會せられざるに於ては、斯る説教に由て無教育なる信徒が學べる漠然たる教訓は未だ是等の謬見邪説に對する萬全の干城とは稱すべからず。是を以て我等の信徒は分裂を起さんとする悪教師の餌食となること甚だ多し、如何となれば彼等の感情をば我等あるひは之を激發したらんも、未だ彼等の智力をば神の眞理を理會せしむるほどに薰陶せざれば也。彼等をして眞理を理會せしむる事は談話を以てせざるべからず、即ち彼等の

第 六 講 話

眼前に眞理を簡短に明瞭に叮嚀に諄々反復して彼等の謬見を退治するを期するを要す。然るに此事は只談話を以てして能くすべき而已、——即ち幼童には一々問答を授け、成丁には一々晤談を成してこそ茲に始めて彼等に我等の所説を理會することを得しむるなれ。且又此種の交際を以て我等は彼等の親愛を得て失なはざらんことを務めずんばあるべからず。講壇より説き出す所の者には、幾分か號令の口氣あるを要す、而して他方に於ては、深厚の交際を以て之を柔らぐるを要す。我等もし眞に彼等の親愛を得んと欲せば、彼等をして胸臆を開きて我等の言を愛重せしめ得る前に先づ彼等をして其爐邊に在て我等の面を見せしめざるべからず、彼等をして病床に於て我等の言を聽かしめざるべからず、彼等をして各々我等が彼等の形骸と精神のため、に慮ることの厚き者なるを曉らしめざるべからず。斯の如く我等その教誨をかれらが日々の爲すべき事、日々の必需、及び日々の誘惑の細節にまで悉く及ばしめ、彼等をして我等が勸戒の實際

第六講 話

に適切なる者なることを感ぜしむるは、最も緊要なる事とす。按ずるに同時に二種の生活——全く彼此相異なる二様の行動——をなさんとする傾向は殆ど一般なり。我等の牧する信徒中にも此傾向に感染せんとする者少なからず。彼等は其感情に於て或る程度までは敬虔ならんことを期す、——即ち祈禱をなす、教會堂に來る、又時々聖餐にも來り陪す、然れども其聽たる所を日々の生活に應用することをば肯てせず、時々するなる是等の行爲および感情を平生の言動に聯ぬることをば肯てせざらんことす。然のみならず、彼等は其日々の生活上に於て細大の試煉に遭ふに當りて中心より速かに悦從することを務めずして、徒らに此等の敬虔なる感情及び此の敬虔なる知識を以て満足せんとす。されば信徒を導びきて其斯く感ずる所を實行せしめんには、親密の交際上における私の勸戒を以て講壇上の一般なる公けの教誨(説教)を敷衍するより善きは無しとす。

箇人的なる此種の交際もし我等の信徒のために必要なりとせば、是を

第六講 話

これらの爲にも亦緊切なる者とす。彼等をして我等の意を領會せしむることの必要なるが如く、我等をして彼等を領會せしむることも亦必要なりとす。是あるに非れば、我等は決して彼等の領會する所と領會せざる所とを知るを得じ。甚だ多くの教師は此點に於ては常に一種の夢想郷に住めり。彼等は其説教に於て明瞭に己れの言んと欲する所を言ふ、或は明瞭に言ふと信ず、彼等の信徒は其説教を聽くに當りて毫も不平または疲倦の徴候をあらはさず。我等の信徒が其殆ど何の義なるかをも知り得ざるが如き説教に忍んで聽きつゝ、毫も苦情をとなへざるは實に驚くべき者なれば也。是に於てか彼等は速了して謂へらく、我が説教は頗る善く領會せられたりと。然れども彼等もし其聽聞人の大半と晤談するならば、其最も善く編たる説教に於てすらも一語も信徒の心に眞に入りし者なかりしを屢々發見するならん。此の如き状態の結果は是れ牧師の方^{かた}に於ては迷妄なる者、信徒の方に於ては暗ざるの暗黒なる者に非ずして何ぞや。信徒の状態に關する此誤解は我等をして信

第六講 話

徒を誨へず棄ちきて安んぜしむ。然れども信徒はいつまでも蒙を啓かるゝ無し。醫師其患者の病狀を毫も辨へずして徒らに其痊愈を夢想するのみにては、未だ患者を醫すに足らず。實は患者の病症を審かにして之に應ずるの藥劑を盛んに投じてこそ之が痊愈を望み得るなれ。精神の病は其見がたきこと肉體の病に譲らず。而して其漠然たる治療に服せざることとは形迹の更に粗なる肉體の病よりも甚だし。我等は其説教が如何ばかり信徒の心に徹せしか、何處に如何にして失敗せしかを懇談親交の中に於て學ぶに非れば、決して之(説教)を十分に信徒をして理會せしむるを得ず。此の如く吟味し來る時には、今まで少からざる満足を以て其公務を考がへつゝ、竊かに自得しゐたる人々も、其勤勞の實効如何につきて驚くべき事實を多く發見するならん。

但し我等は他の最も緊要なる事業につきても亦此の如き交際を必要とす。即ち我等は眼前に起り來る箇人的なる場合にそれぞれ應ずることとを能くせん爲に之を要す。衆多の細長き管をもてる器に水を満たさ

第六講 話

んとする者若し其一々の管より注ぎいるゝの勞を厭ひて手短く一面に水を打かけなば何如ん、其人のなす所は必らず徒勞ならん耳。宜なる哉此言や、衆多の人々を導くべき牧師もし箇々に之を誨ふることをせざして、單に一般の驟雨然たる教誨を彼等一同の上に降らせて足れりと思せば、其失敗せんこと掌を指すが如くならん耳。但し此譬喩も未だ真理を説き盡すに足らず、何となれば一々の病人は一々別々に萬殊の治療を要すれば也。責戒、鼓舞、檢束、放任等を調合すべき比例は殆んど二つとも同じき場合はあらず。粗製なる萬能藥は普通の野巫醫の手に在て失敗するが如く、靈の醫師の手に在ても亦失敗すべし、只靈魂の利害が肉體の利害よりも遙かに大きく遙かに貴きが如く、後者の失敗よりする結果の遙かに悪きある而已。

然のみならず我等この平生の交際を群信徒と保つことを怠るときは、亦彼等が日々の遭遇を其靈魂上の利益に轉化するの好機會を看出すに由なからんとす。用心周到なる農作家は其耕種の好時侯を窺がひ、空

第六講 話

氣または日光の變をば一として徒らには過さず、此の日の暑熱、又は彼の日の驟雨を一々に利用して、十倍百倍の收穫を得んことを務む。是の如く靈田の農作家もまた然りとす。病患の發作、健康の恢復、其他種々の出來事は、皆我等に與ふるに禍を轉じて福となすの好機會を以てす。我等平生かゝる機會をうかひて之を利用することを心がくるに非ざらんば、決して此事あるを得じ。斯の如く人生の浮沈盛衰榮枯得喪悉く建徳の機會となり、化導の門戸となる者なれども、居常活眼と愛心とを以て其群信徒のために慮るに非ざらんば、安んぞ此機會をとらふるを得んや、安んぞ此門戸を見いだすを得んや。家庭に於ける憂喜、小兒の疾患、望外の平愈、意表の成功、其他斯の如き萬殊の機會は我等に供するに柔軟なる活人心を以てす。斯の如き人心は神のため又彼等自身のため之を打て有益なる教誨を深く銘刻するに適する者にして、斯る好機會あるに非ざれば、頑然として容れざらん眞理も今は容易にこれに感徹するに至る。

第六講 話

但し此親密の交際が斯の如く緊要なるは唯に我等の牧する群信徒の實狀を審かにして之を臨機應變に待遇するの力を是に由て得るのみには非ず、是亦我等をして其の事業の成功に缺くべからざる習慣及び氣風を己の心中に保たしむるために最も必要なる者とす。是あるに非れば、我等は其群信徒に對して眞實の活同情を保つ能はず。我等もし眞に同情同感を他人に表せんと欲せば、彼等が特別なる需用、艱難及び憂悲に際して親密に之に觸れざるべからず、神の吾人を構造したまへること實に斯の如し。人々の爲に憂へ、人々とともに喜ぶを得んには、先づ斯の如く之と一身上の交をなし、之が箇々の困難を察せざるべからず。是故に我等は其群信徒を一々に薫陶することを務めずして、單に講壇上より一同に説教することを是れ事とせば、空漠たる者となりをばらざること殆ど稀なり。是の如くする時は我等は多衆に向ひて演説する時に裝ふが如き演劇的の感情に慣れて、終に眞實の基督教徒的同情を忘れ去らんとす。人の艱難を親く聞くより來るが如き深厚の同感、胸

第六講 話

氣または日光の變をば一として徒らには過ぎず、此の日の暑熱、又は彼の日の驟雨を一々に利用して、十倍百倍の收穫を得んことを務む。是の如く靈田の農作家もまた然りとす。病患の發作、健康の恢復、其他種々の出來事は、皆我等に與ふるに禍を轉じて福となすの好機會を以てす。我等平生かゝる機會をうかひて之を利用することを心がくるに非ざれば、決して此事あるを得じ。斯の如く人生の浮沈盛衰榮枯得喪悉く建徳の機會となり、化導の門戸となる者なれども、居常活眼と愛心とを以て其群信徒のため慮るに非ざれば、安んぞ此機會をどらふるを得んや、安んぞ此門戸を見いだすを得んや、家庭に於ける憂喜、小兒の疾患、望外の平愈、意表の成功、其他斯の如き萬殊の機會は我等に供するに柔軟なる活人心を以てす。斯の如き人心は神のため又彼等自身のために之を打て有益なる教誨を深く銘刻するに適する者にして、斯る好機會あるに非ざれば、頑然として容れざらん眞理も今は容易にこれに感徹するに至る。

第六講 話

但し此親密の交際が斯の如く緊要なるは唯に我等の牧する群信徒の實狀を審かにして之を臨機應變に待遇するの力を是に由て得るのみには非ず、是亦我等をして其の事業の成功に缺くべからざる習慣及び氣風を己の心中に保たしむるために最も必要なる者とす。是あるに非れば、我等は其群信徒に對して眞實の活同情を保つ能はず。我等もし眞に同情同感を他人に表せんと欲せば、彼等が特別なる需用、艱難及び憂悲に際して親密に之に觸れざるべからず、神の吾人を構造したまへること實に斯の如し。人々の爲に憂へ、人々とともに喜ぶを得んには、先づ斯の如く之と一身上の交をなし、之が箇々の困難を察せざるべからず。是故に我等は其群信徒を一々に薰陶することを務めずして、單に講壇上より一同に説教することを是れ事とせば、空漠たる者となりをはらざることを殆ど稀なり。是の如くする時は我等は多衆に向ひて演説する時に裝ふが如き演劇的の感情に慣れて終に眞實の基督教徒の同情を忘れ去らんとす。人の艱難を親く聞くより來るが如き深厚の同感、胸

第六講 話

中に浮ぶに由なし。病牀の傍に在て慰むるをなし、良心の病める人々を手から執へ、我等の指を以てするが如くに靈魂の傷を繋り、惱める心にキリストの福音の乳香を灌ぐ時に我等は萬殊の教誨を得る者なるが、是の如く單に講壇説教をのみ事とするに於ては、此等の教誨は凡て之を得るに由なからんとす。我等は眞に惻隱の心を動かす事も無く、眞に同情を表する事も無くして、唯漠然たる一般の感情を弄するの風を長養するが故に、遂には柔軟病身的にして、徒らに己が懐かざる感情を喋々し、己が爲すに懈き努力を喋々する而已となり了らん。此の如く演劇的なる感情のみを装ふ事は我等自身の靈魂を大いに傷つけ、我等の聖職を大いに弱むる者なり、神が我等をして其病める傷つける、貧き、惱める兄弟の中に施藥の醫たらしめたまへるは、是れ我等の感情のため、に多幸なる大訓練たり、我等の蒙味なる精神のため、に有益なる教誨たり、されば斯く神が設備して我等の特別なる職分たらしめたまへる此事業を怠らば、我等かならず其怠慢のため、に大いに自ら苦しまざるを

第六講 話

得じ、如何となれば此怠慢たるや、是れ克己を故らに缺くの罪および自恣に流れ荒むの愆と親密に關係する者なれば也。箇々の信徒に一々注意する事、彼等とともに苦しむを辭せざる事、遲鈍無頓着、表裏反覆等を耐へ忍ぶ事、待遇を温和にする事、頑硬若くは羞恥を竊かに退治する事、文學運動、其他凡て我等の本職を疎そかにせしむるが、如き嗜好を肆にするの風を制限する事、人間をばキリストの贖ひ給ひし者として、其最も弱く最も鈍く、或は最も醜陋なるをさへも、是れ我等すべての爲に死たまひしキリストが我等に委托したまへる我等の任なるが故に、敬重する事、——此等の事はみな自恣の悪習と屢々戦かひ、克己の美風を大いに養ふに非れば、到底能くすべからず、是なくんば我等の聖職は弱からざるを得ず、是あらば、神の恩澤によりて我等の事業は必らず強からん。

我等が聖職の此部分にして其緊急重要なること果して斯の如くなりとせば、請ふ我をして之を有功に盡すの方法につきて二三の實地方針

第六講 話

を諸君の参考に供せしめよ。

第一には此事業の困難なることを覺悟せよ。抑も牧師又は教師として信徒を訪問するの事たるや、遠方より之を見れば容易き者のごとくなれども、真面目の熱心を以て之に従事せんと欲する者には何の職か是よりも難き者あらんや。大監督レイトン師 (Leighton) は訪問する時に或は無益にをはらんことを恐れ、或は有害に歸せんことを恐れたるが、此恐懼は本問題に熟通せる人々の必ず皆常に感ぜし所ならん。されば斯る困難に遭遇せんことを預期し、其場に臨んで急に倉皇狼狽せざらんことを覺悟せよ。斯の如き困難に出で逢ひたる者は少なからず、彼等は之を己れに限る事として退縮して曰く、我等は群信徒を有益に訪問するの才能なしと、殊に知らず其の困難は是該事業に本來固有する者なるを。嗚呼何ぞ思はざるの甚だしきや。次に又此等の困難の存在することを覺悟し、之を逃避せずして敢然と之に面せんことを期せよ。然らば如何に是等を處置し、如何に是等を克服すべきかを知らん。是等の困難

第六講 話

は其種類萬殊にして、我等の誘惑と品質より來り、又我等が牧する群信徒の誘惑と品質より來る者なり。例へば我等は動もすれば其牧師として群信徒を訪問するの事をやめて單に通常の交際をのみ是れ事とせんとす、而して又群信徒は斯の如き我等の怠慢を却つて多くは歓迎せんとす。即ち衆多の人々は自ら眞箇に敬虔の人たらんとを措きて、單に其の牧師と朋友の交際を保たんとを欲す、其交際にして宗教上の趣を有するに於ては特別にも然りとす、彼等は之を以て或る罪惡、或は疎虞怠慢の補償たる者となす。故に我等もし二三の聖句、懇懃なる言晤、丁寧なる挨拶等を言かはす事を以て教會の交際と見做して安んぜば、彼等は必ず悦んで之をして然らしめん耳。然れども我等もし一層彼等に密邇せんとし、彼等と取組まんとし、彼等の良心に悔悟を來さんとし、汝は其人なりとの直言を以て彼等を其隠匿所かくれがに訪はんとするならば、彼等は其天性の術策を凝して我等の眞箇まごに來り逼るを避けんと務むべし。されば我等の交際は汎漠たる交遊の快を以て足れりとすべから

病健兩者の勸戒

百六十六

ず、之れを適當に保たんには彼の諸の大美德——即ち忠直と溫柔、毅剛と忍耐、眞理と愛を一時に兼ね備へたる美德——を躬行するを要すべし。我等は此にて毎歩毎轉かならず新しき困難に出あふべくして、其困難の如きは只神恩の力を以て打克つを得べき而已、我等その往て訪問する人々にむかひて單に尋常普通の件々を懇慇に懇談するを以て足れりとせずんば、彼等(受訪問者)は我等の言に心服せる者のごとくに見えんも、竊かに我等の談話をことごとく汎漠たる宗教問題に止めんと、百方試むべし、或は又彼等始終他人の品行に話頭を轉ずべく、或は直に聖書の若干句を讀解せんを我等に請ひ、次で禱らんとを求め、斯く好外觀の禮拜にことよせて自家の吟味を免かれんとを計るべし。罪の重荷に惱めども未だ目醒めざざる良心の詭計遁辭は實に是の如く夥だし、斯る良心は溫柔を體して嚴しく之を責め、綿中の針を以て之を刺すを要す。

且又是の如き困難は判然不敬虔なる人々の上うへに於てのみ發見せらる

病健兩者の勸戒

百六十七

る者に非ず。否な、良心が眞に目醒たる時に於ても、——良心が殆ど服せんと欲する時に於てすらも、其人は十分の服罪をのがれんとの苦心努力を屢々倍蓰し來るなり。彼その針端の初めて透るを覺ゆるや非常に悶へて逃れんとす、我等の胸中にも亦彼を助けて逃れしめんとの奇情あるを屢々見る、我等はみづから其結果の如何ならんかを氣づかふ神經恐怖を懷く多し。是に於てか一種の黙約に由て信徒の短處は我等の不問に置く所となり、眞箇の警醒よりする大結果は終に之を獲るに由なし。

此等はみな困難なるに相違なし、然れども我等もし其職を正しく盡さんと欲せば、之に克たざるべからず。我が教會が之を我等の本分と考ふといふ事は、會長に任せられんと求むる人々に問ふの此問を本件について會吏に特別に命ずる所の辭と相較べ見ん者には、一目に瞭然たるべし。即ち會吏ゴウジの職分として明言せられたる所は、病める者と貧しき者と弱き者を助け得る爲に夫等の人を尋ね、其世計セケイと其姓名と其居所ウキヨを

會長プレジデントに知しむるに止まれり、然るに今我等が論じつゝある此の問は是れ鈍き良心を警醒し惱める良心を指導すべき遙かに高き職掌を指す者なること明らかなり。されば今我等が論及せる者は他人の靈魂を導くといふ困難掛念なる大問題にして、之を善く行なはんには必らず面を對カガへ膝を交へての告白(懺悔)を相當に調合するを要す。我等もし其群信徒を勸戒するの訪問をして一定の方案あらしめんと欲せば、之につきて明瞭の見解を持せざるべからず。

— 我が教會は古來決して神の御言とサクラメントとを司る者が其職掌の至要なる部分中に位る所の事——神の役者サシヤとして人々の良心を處遇するの事——を辭するを許さんとは想はざりき。但し他方より之を見るに、此に於ける我が教會の意思と羅馬教會の意思との間には一大逕庭の存するあることも亦均しく明らかなりとす。此逕庭は之を行爲の方針たる或る主義に歸するを得べきや。我は其或る主義に歸

第 六 講 話

第 六 講 話

し得べき者なるを信ず、而して其逕庭は我等あるひは之を此に見いだすを得んかと思ふ。羅馬教會の目的と我が教會の目的とは大いに異なり、而して其相違は直ちに我等各自の所行に影響す。羅馬教會の目的は人々の良心を教師の權下に持きたさんとするに在り、而して教師をして審判者たらしめ、其判決には全然服従すべき者たらしむ。我が教會の目的は人々の良心を警醒し啓發し勁堅するに在り、而して聖書の援助と通常の宣教とを以て箇々の靈魂を正しく導ひかんことを期す。斯の如く相異なる目的を有するが故に、此等の兩教會の間に於ける逕庭は甚だ大いにして、單に五十歩百歩といふが如き程度の相違のみには非ず。教師が人々の良心に對して私かに盡す所の努力は徹頭徹尾此の差違のために影響せらる。其一は常に箇々の良心を服従せしめんと求め、一は常に箇々の良心を解放せんと求む。目的の此差違は此等の兩教會に於て唯に誠規の施行上にのみならず亦教義の陳説上にも漸々と巨大の影響を及ぼすに至りぬ。

第六講 話

是の如く羅馬教會に於ては私の告白(懺悔或は告解)を一切の信徒に命じ、我が教會に於ては唯或る非常の場合に之を許すの差違あるのみに止まらず、此件の精神もまた此等の二教會に於て全然相異なる品質を呈す。羅馬教會の教ふる所には云ふ、教師にむかひて告白(告解)する事は基督の教會の直接なるサクラメントたる禮典なり、之を正しく行なはんには、其言ふ所を秘密にして胸中に有らゆる罪愆を悉く告げざるべからずと。斯の如くにして告白するや之に次ぐに私の解罪(免罪)を以てす、而して此解罪たるや斯の如くに回憶して告白したる罪愆に特別の赦免を與ふる者と信ぜらる。而して此告白の制と相應じて該教會は勸めて曰く、各箇の靈魂は須らく恒に或る教師の指揮を奉ずべし、此の靈魂の指揮者は須く己れに諮る人々を平素指導すべし、良心は須く此教師をして主(ま)とらしむべしと。彼等の見に於ては是れ希求すべき結果なりと云ふ。良心が最も規則正しく其すべての重荷(おも)を神の役者(教師)の前に其靈魂の服従を表する直接行として盡く告白し、彼が指揮を最も謙

第六講 話

りて受け、彼が勸告に最も謹んで従がふは、是れ靈魂の最も健全なる状態なりと稱す。是の如き制度の結果は何如なるべきかは之れを知るに難からず、即ち是れ衆多の弊害に流るべくして、左に列擧せる如きは其重なる者のみ。元來告白懺悔の事たるや或る特別の場合に於て、或る非常の救療策としては、落膽の淵に沈みて復浮むの望なき人心が絶るに善からん者なりとは雖も、之を最後の手段として許さずして、斯く之(人)に向ひて告白懺悔する事を號令し、其甚だしきに至りては義務として之を奨励する時は、是れ許多の人々を驅て偽善者とならしむる也。即ち人々は其靈魂の眞實なる大罪を隠して其告白を假扮するの悪習を生じ來るべし。之に反して又一切を悉く告白せんと務むる人々は良心の行動を弱むるに至るを免かれず、是れ是非の決断は良心が神の眼の下に在て聖書の光に由て自ら立つべき嚴かなる責任なるに、之を他人に一任する者なれば也。斯の如き告白を聞く教師は我等の罪愆羞辱および弱點の秘密を盡く受くる者として第一にはキリストに代る者とす、

第六講 話

又第二には吾人の行爲を是非し指揮する者として良心に代る者とする、即ち是れ一方に於ては彼をして基督たらしめ、他方に於ては彼をして吾人の良心たらしむる者なり。

此制度に反對して我が教會は我等が信ずる如く神の言(聖書)と初代教會の模範とに循ひて、罪愆の告白をば強ふる無くして之れを許し、唯若干の規定したる特別の場合に於て、——而も告白の風習を以て健康の狀態とはせず、病める良心に健康を復するの手段として、——僅かに之を許すのみ。我教會は賢者が醫藥を觀るが如くに之を觀る、即ち神が吾人の病患に應ずる多福の治療法として悉くも善はへたまへる者と認め、然るも尙健體のために設けたる者に非ず、健體とは全く相容るゝ者に非ずと信ず。見解の此相違は基督の新王國に於て告白懺悔の事が占むる地位の輕重高下に關する教義上の大相違に基おする者とする。我が教會は之を特別のサクラメントたる功徳を附與せられたる基督の特定例規とは見做さず、只憂懷を開き、重荷を輕むるために許されたる方

第六講 話

便と認むる而已、決して之を以て特別の赦宥または解罪を悔悟者に與ふる者とはせず、實に斯の如きは是れ全能の神に一般に呈する告白及び滿堂の中にて與ふる公やけの解罪に由ても均しく得らるべき者なれば也、只是れ吾人が兄弟たる基督信徒に置くを得べき靈魂上の信任と考ふる而已、然ども實は是れ靈魂の大醫たる者に打明かすを以て最も自然なる又最も正當なる者とする、如何となれば彼の大醫は斯る疾病に尤も經驗ある者なるのみならず、又斯る疾病を治療すべき者として神が特別に設けたまへる者なれば也。

されば我等は其職務中の此の困難なる部分に於て此の精神を深く體認せざるべからず、我等は眠れる良心を醒さんとを求むるを要す、傷つける良心を醫すを要す、若し無頓着なる良心あらば、我等は力を盡して之を啓發するを要す。若し竊かに罪の重負に苦しむ良心あるを見れば、之を勸めて神に懺悔せしむるを要す、若又切に請はるゝあらば、我等みづから、神の役者として、斯る人々の懺悔を聞くを要す、但し之をなすに當

第六講 話

りて我等は他意あるべからず、唯其良心を健全の状態に回復し、之をして神が其(良心)の警戒と看守とに委ねたまへる己が靈魂を導びくを得るの地位に還らしめんことを目的とすべし。

此等および其他の困難は諸君が病る者又は健かなる者に私かに勸戒を盡す時に忽然として諸君に迫り來らんとす。實に斯の如き事業は諸君が力の強弱を悉く試みずんば止まじ。此の切要なる難事業において、我が今少しく諸君の参考に供せんとする二三の段に實地的なる軌範庶幾くは幾分か諸君を裨益するあらん歟。

請ふ諸君の牧會的訪問を一定の方針に循ひて行れ、單に之を其日其日の風模様ふうまように打任する勿れ。諸君が牧する教區あるひは教會員を先づ紙上に圖せよ、而して若干日限内に之を順次に規則正しく訪問せよ。諸君もし又其訪問を一々に記録し、期を定めて時々之れを再閱するならば、——即ち一週に一回、又は一月に一回と、諸君の最も便とする所に循ひて之を再閱するならば、此事業に於て其諸君を利すること更に大い

第六講 話

なるべし、但し一定の方針を立つと雖も、其方針の奴隸とは成るべからず。若し之が奴隸とならば、諸君の努力を散らし且つ弱むること蓋し大いならん、如何となれば、努力は之を一處に凝集する事に由て功效の大なる者なれば也。例へば同時に二事を愨こたに扱かはんよりは、先づ一事を成し、然る後に他事に着手するをこそ得策とするなれ。斯る場合に於ては一事を再三反復するを要す。されば何れの場合に於ても之を満足の落着にまで運ぶことを務めたる後ならでは其力を弛めて他に轉ずる勿れ。若し満足の落着に運ぶを得ざりしならば、暫く之を全く打棄て置け。諸君の不訪問をして其人の胸に釘うたしめよ。是れ汝等の見證を拒む府邑つしやうをば背にして他の府邑に向へどの我が主の規則に依る者と言はん。

次に又諸君が訪問のために預備せよ、即ち諸君が勸戒せんとする人物の品質を屢々計較し、又諸君が眞に自ら企圖する所の目的を屢々商量し、斯くして其事件の諸關係を悉く預め眼中に描き出すを要す。次に又

第五講 話

毎訪問の前に此度は如何なる事を勸戒せんかと胸中に決着して之が預備をなすを要す。判然たる一定の目的を持せよ。訪問をなす毎に必ず何事をか爲すあらんことを期せよ。——或は或る罪を悔悟せしむるを期すべく、或は或る眞理を貫徹せしむるを期すべく、或は或る恩典を感佩せしむるを期すべく、或は心中の或る暗處を照すを期すべし。是のとき判然たる一定の目的を以て信徒を訪問する事は、我等の牧會的交際をして非常に力あらしむる者なり。

又訪問に先だちて密かに神に禱りて之が預備をなせ。諸君が今より訪問せんとする人々の模様を神の御前に呈出せよ。彼等を處遇するに足るべき愛を祈れ、信を祈れ、力を祈れ、光を祈れ。諸君かく一切を神の御前に祈禱を以て呈出する時には、最も困難なる事件すらも如何に不可思議にも屢々其すべての盤根錯節を失ひ去りて甚だ容易なる者となるぞや。凡て訪問を試るに當りてや必ず群信徒をキリストに携さふる事を以て大目的とせよ。彼等をして其罪ふかき事を感じしめ、基督あるに

第六講 話

非れば全く沈淪するの外なきことを曉らしめ、全心全力を以て基督に歸向せしむるに至るに非ざれば、足れりとすべからず。常に基督を人々の目の前に崇めんことを求め、其十字架を高めんことを求め、人々を彼大醫王の手下に携へんことを求めよ。彼等をして諸君を歓迎せしめ得たるを以て足れりとせざれ、諸君の意見を容れしめ得たるを以て足れりとせざれ、福音の救贖法を漠然と是認せしめ得たるを以て足れりとせざれ、單に外部の行爲を改めしめ得たるを以て足れりとせざれ、彼等をして基督を愛し且つ頼む眞實の信徒たらしめんことを期せよ。箇々別々の靈魂をして赦罪復和生命平和及び喜樂を基督より求めしめ、又其報謝として一切を基督に獻げしめんことを期せよ。

勿論是皆勞多し、然れども十二分に其勞を償はん。諸君斯の如くに其職を盡すに於ては、唯に其牧する人々の心を收攬するを得んこと尤も大いなるのみならず、其聖職の他の部分にも亦齊しく便する所あらんとす。是れ必ず諸君の祈禱に與ふるに活氣を以てし、諸君の説教に與ふる